

愛と暴力—赦しのキリスト教化とその残余

甲南大学人間科学研究所叢書『心の危機と臨床の知』第12巻、『〈戦争の子ども〉を考える』に私は、「喪、赦し、祈り—数ある例の一つではない」という一文を寄せた。それは数年来、本研究所の研究テーマの一系列をなす「和解と赦し」のささやかな成果の一端である。そこで私が展開しようとしたのは、和解と赦しの差異であり、それと同時に暴力からの「解放」過程だと言われる和解プロセスからこぼれ落ちる、赦し得ぬ残余の問いであった。それは、比類なき歴史的試みであった南アフリカ共和国における「真実和解委員会」の動向に問いかける形をとった。この一文末尾で私は、グローバリゼーションの中における紛争解決のキリスト教化の一過程として、ウィリアム・シェイクスピアの『ヴェニスの商人』に言及した¹。実際上の長さの限界からここでは、本質的な論点のみを言葉にしたのであったが、読解の根拠はほとんど示すことはできなかった。その不十分さを補うため、本稿では『ヴェニスの商人』に焦点を絞って論点を別の形で浮き彫りにしてみたい。以下は従って、私の小論の末尾にある一節に付した長い注である。

1. 人間的な、あまりに人間的な

シェイクスピアの四大悲劇『ハムレット』『オセロー』『マクベス』『リア王』に対して、『ヴェニスの商人』は伝統的に喜劇と評価されてきた。劇中のエピソード「小箱選び」を論じたフロイトは、彼の文章をこう始めている。「シェイクスピアからの、一つは愉快で一つは悲劇的な二つの場面が、最近わたしにちょっとした問題を設定し、それを解くきっかけを与えてくれた」と²。一つは『ヴェニスの商人』、もう一つは『リア王』であり、前者においては、ポーシャをめぐる求婚者たちが繰り広げる小箱選びの場面であり、後者においてはリア王が、三人の娘に領土を配分する場面である。小箱選びでは、一人の男が三つの小箱、類型夢からすれば三人の女性から一人を選ぶのに対して、リア王は、三人の娘の中から領土を与えない娘を一人選ぶという形になっている。フロイトは、喜劇、悲劇の差異があるにもかかわらず、変換を加えて、そこには同じモ

¹ 拙論「喪、赦し、祈り—数ある例の一つではない」、森茂起・港道隆編『〈戦争の子ども〉を考える』、平凡社、2012年、p. 312 ページ以下。

² S. フロイト「小箱選びのモチーフ」、須藤訓任訳、『フロイト全集』第12巻、岩波書店、2009年、291 ページ。

モチーフが反復されていることに注目する。彼は次に、詩的作品を夢と同等のものに見なし、あちらこちらに伝わる神話や童話や他の詩的作品、例えばアプロディテ、灰がぶり姫、プシュケー等の中にも同じモチーフが認められるとして、その無意識的な根拠を探って行く。そこで選ばれるのは常に、最年少の寡黙な存在である。そこに彼は、愛の女神であると同時に死の女神であるという人類普遍のアンビヴァレンツ（両価性）を見るのだ。ここでは、フロイトの読解をこれ以上検討することはしないが、注目すべきは次の点である。第一に、小箱選びのモチーフを換喩的に他の話や作品へと辿ることによってフロイトは、『ヴェニスの商人』というテキストを読んではいない。彼が残した他の芸術作品読解の場合には、同じようにテキストを読むのではなく、作品から出発して詩人を始めとする芸術家の無意識を読む方向に進むが、この場合はそれとも異なる。第二に、何れの場合も、フロイトは芸術作品を夢へと方法的に還元して事を論じる。それに対しテキストそのものを、今回は『ヴェニスの商人』を読む努力をすることによって、フロイトのこのアプローチがもっている限界を反照的に浮かび上がらせたならどうなるのか？それを試みたのがサラ・コフマン『様々な変転—サトゥルスヌの徴の下におけるヴェニスの商人』である³。小品ながら優れた読解であるこの著作は、登場人物たちが辿る様々なconversions、変身、変転、改宗の運命の条件として、登場人物たちが最初から見せているアンビヴァレンツを確定して行く。それも、書かれているテキストを書かれていない「無意識のテーマ」へと還元するのではなく、あくまで書かれているテキスト表面に「一般化されたアンビヴァレンツ」を読みとって行くのだ。コフマンの試みから多くを汲み取りながらも、以下に私は、ヨーロッパの伝統的な象徴系を参照しながら彼女の読解とは独立に、私なりに「一般化されたアンビヴァレンツ」を問題にしたい。それは、別の地点を目指して別の再コンテクスト化を行うためである。

フロイトが評するように、作品は確かに「愉快」で、明朗な雰囲気をもっている。結末もハッピーな状況で結ばれているかに見える。ユダヤ人差別が全編の舞台装置になっており、没落に行き着くユダヤ人シャイロックの不幸にもかかわらず。だが、作品が喜劇だと形容されても、それは誰の目に喜劇なのか？その形容に反対するいわれはない。しかし、テキストを読み終えた読者の、上演に立ち合った観客のすべてが、快活な気持ちを経験して終わるわけではない

³ Sarah Kofman, *Conversions. Marchand de Venise sous le signe de Saturne*, Galilée, 1988.

かも知れない。シャイロック、さらには娘ジェシカの運命に暗澹たる思いを抱く読者ないし観客もいるだろう。演劇の場合にはもとより、演出に依るところが大きいとはいえ。ここでは、そうした評価以前に、テキストに描かれている様々な conversions の政治的、倫理的、哲学的な問題系にアプローチすることを試みよう。

以下の引用は、長年の研究を基に、シェイクスピアの主要な戯曲の個人訳を果たした大場建治訳に依拠する。一定の一貫性をもって可能な限りオリジナルの英語に寄り添った一連の翻訳は、読者をシェイクスピアの日本語訳の伝統であった「意識の嵐」に苦しめられることから解放し、英文学研究史ばかりでなく、「人文学」研究の歴史に不可逆的な足跡を残すであろう記念碑的な出来事となす。その営為にここで敬意を表するとともに、引用にあたっては口調上、最小限の変更を加えた箇所があることをお断りしておく。

2. 一般化されたアンビヴァレンツ

この作品は、その主要な登場人物は三つのグループに分かれているが、それぞれ別の空間の中で動いているところから始まる。まず、ヴェニス の市民として行動している商人アントーニオ、アントーニオにとっての親友バッサーニオ、彼の「腰巾着」ともいうべき友人グラシアーノであり、もう一人の仲間ロレンゾである。彼らは、金銭と女性を媒介として結びつく兄弟集団を、従って男性社会なす。彼らは伝統的なホモソーシャルな関係にある。(アントーニオとバッサーニオの間にはホモセクシュアルな雰囲気さえある。) 彼らが動く空間はキリスト教徒のそれである。次には、高利貸のシャイロックとその娘ジェシカであり、彼らは他のユダヤ人とともに、ヴェニスに出入りはできるものの、その空間の周縁を占めている。彼らは、キリスト教社会の傍らで、相対的に閉じた伝統的世界を形成している。最後に、離れ小島にベルモントに住む裕福で「高貴な」女性ポーシャと侍女のネリッサである。キリスト教社会集団とユダヤ人社会集団の関係は、アントーニオとシャイロックの反目に極まるユダヤ人差別を基本として成り立っているが、何れも男性中心主義の共同体をなす。それに対して、第三のグループは、両方の男性中心主義集団の外部にある女性社会であり、差し当たりユダヤ人差別の外に置かれている。そこには、キリスト教共

同体からは排除されるユダヤ人社会に属しながら、男性中心主義によって周縁に置かれているジェシカとの空間構造的な親和性があるだろう。

舞台の全体は、キリスト教／ユダヤ教および男性／女性がなす中心／周縁、海洋貿易都市ヴェニスと、ベルモント、美しき丘あるいは美しき山の高低によって配分されている。それが伝統的な社会空間を構成する構造であるが、それが動きだし、変動し、変容をこうむり、別ものに変貌して行くのが物語である。その意味では、conversion とは、何よりも共同体構造そのものの転回である。

2-1. これらの登場人物たちは、何れもアンビヴァレントな存在として描かれている。まずはアントーニオから検討しよう。

彼は、徹底して暗い、憂鬱な存在として登場する。芝居の幕は彼の台詞で始まる。

In sooth, I know not why I am so sad :
It wearies me; you say it wearies you;
But how I caught it, found it, or came by it,
What stuff 'tis made of, whereof it is born,
I am to learn;
And such a want-wit sadness makes me,
that I have much ado to know myself. 改行

まったくどうしてこんなに憂鬱なのか。われながらいやになる。君たちだって付き合いきれんさ。だがこの憂鬱ってやつ、どこで見つけてきたものやら、どうして捕まえてきたものやら、その素材たるや何、その生国たるやどこ、わからない。おかげでこのとおりに心ここにあらざる間抜けの奴、己自身を知ろうにもその正体は五里霧中。(注 p. 9)

こうしてアントーニオはメランコリーの中で登場する。出会った連中が皆「顔色が悪い」と心配し、グラシアーノが You have too much respect upon the world. 「世間＝世界に気がねしすぎるんじゃないのかい」と言うのに対してアントーニオはこう答えている。I hold the world but as the world...; A stage where every man must play a part, And mine a sad one.

「僕には世間は世間 [世界は世界]、それだけのことだ、グラシアーノ。ただ世間＝世界は舞台だからね、だれでも一役勤めなきゃならん、ぼくは憂鬱の役を演じる。」(大場訳、14)。

「憂鬱だ。しかしその理由が分からない」と言って登場するアントーニオに、その理由が金でも恋でもないとするならと言って、ソラーニオはヤヌスの名前を出している。

いやさ、ヤヌスの神は二つ面、笑顔と渋面の裏表、その神様に誓って言うが、造化の女神は選りも選ってずいぶん妙な人間をこしらえたもんだ (I, 1, p. 12)。

Janus、それはローマの神で、ある状態から別の状態への「移行」を表わす。頭の正面と裏面に二つの顔をもつ。空間的には、家の閤を見張り、内部から外部へ、外部から内部への通過を保護する。平和から戦争、戦争から平和の移行を司り、街の境界に位置する。時間的には、朝の神であり、毎月の日、人々はヤヌスを祭る。それは年の始めの月をも表わし、ラテン語の *januarius*、英語の *January* として残っている。ヤヌスの二面性、流動性、変転、これこそがこの物語を貫く時間の効果である。とはいえ、少なくとも出発点においては、アントーニオは煌びやかな色彩のない憂鬱の人、つまり鉛の人だということになるだろう。

ただし、翻訳の問題を指摘しておこう。Now, by two-headed Janus, Nature hath framed strange fellows in her time、これを大場訳は「いやさ、ヤヌスの神は二つ面、笑顔と渋面の裏表、その神様に誓って言うが、造化の女神は選りも選ってずいぶん妙な人間をこしらえたもんだ」と訳している。Now が「いやさ」というのは、正しいのか間違っているのかよく分からないが、それはおくとしても in her time が訳されていない。「選りも選って」がそれに対応するのも知れないが、そう訳す根拠は不明である。少なくとも私には。文字通りには「双面のヤヌスに従って、自然は彼女の時間の中で奇妙な連中を枠づくってきた」となる。また「造化の神」と Nature を訳するのは相応に勇気が要るだろう。

冒頭の海のイメージは、この物語が変転の物語だということを既に表わしている。「憂鬱だ」と言うアントーニオに対して、サラリーノが言う。Your mind

is tossing on the ocean 「君の心はだねえ、いま大海原の波に揺さぶられているのさ」(p. 9)。toss は船が揺れるという意味だが、「波」に相当する単語はない。海は何も約束しない。大金持ちもあつという間に一文無しになる等々。

その中で、アントーニオとバッサーニオは正反対のキャラクターとして登場する。アントーニオはヤヌス神の一面「悲しい面」を表わし、バッサーニオは「明るく楽しい側面」を表わしている。しかし、時間の中で、二人ともその性格を変えるであろう。一人一人見ておこう。

彼のメランコリーは、あたかも鉛のように、悲しみ、冷たさ、死の不動性、孤独、不毛さ、乾き、諦め等々に連なる。彼は生命を享受しない。彼の分身であり、生命を謳歌するバッサーニオのためにだけ生きている。ソラーニオの台詞にこういうのがある。I think he[Antonio] only loves the world for him [Bassanio] (II, 8) . 「あの人の愛情は彼一本なんだよな」(p. 81)。

取り巻きのどの推測もその憂鬱を説明しない。彼の心の動きは、世界の中で彼が占めている役割に由来するからだ。

ぼくには世間は世間、それだけのことだ、グラシアーノ、ただ世間は舞台だからね、だれでも一役勤めなきゃならん、僕は憂鬱の役を演じる (I hold the world but as the world, Gratiano; A stage, where every man must play a part, And mine a sad one)。 (p. 12)

world はやはり「世界」と訳すべきだった。「世界は舞台だ」という言い方は、シェイクスピアの他の作品にも現われる (『お気に召すまま』)。

また、憂鬱に取り憑かれているアントーニオが始めてバッサーニオに会う場面ではこう言う。My purse, my person, my extremest means, Lie all unlock'd to your occasions. 「ぼくの財布、ぼくの保証、財産のぎりぎりまで 必要とあればどうか自由に使ってくれえたまえ」(p. 18)。

アントーニオはこうして、商人であるにもかかわらず、現世的な利益には全く関心がない。バッサーニオに全面的に奉仕する以外に生きる理由をもっていない彼は、既にあらゆるものを犠牲にする用意がある。従って、バッサーニオのためにシャイロックから借金をし、返済できなければ肉一ポンドを与える、つまり命を与えることに易々と同意するのは、アントーニオが既に命を捨てているからだ。そして最終的には、愛するバッサーニオが自分の許を去ってポー

シャの許に行くことをも許すのだ。自己懲罰的マゾヒズムの憂鬱である。

ところが、このネガティブな、否定的な側面は、キリスト教徒の世界ではポジティブに、肯定的に評価されている。首尾よくポーシャを射当てた直後に舞い込んできたアントーニオの悲報、彼の船がすべて難破し、借金を返すことができなくなったとの知らせを受けて、ポーシャに事情を説明するバッサーニオはこうアントーニオを褒め称えている。

Portia: Is it your dear friend that is thus in trouble?

Bassanio: The dearest friend to me, the kindest man,
The best-condition'd and unwearied spirit
In doing courtesies, and one in whom
The ancient Roman honour more appears
Than any that draws breath in Italy.

P: そのお困りの方があなたのご友人なのね。

B: いちばんの友人です、あんな親切な男はいない、
人格に非の打ちどころなく、人のために尽くして
倦むことを知らない。古代ローマの
名誉の精神が、いま生きているイタリアじゅうの
だれよりもあの男の中に息づいている。(p. 118)

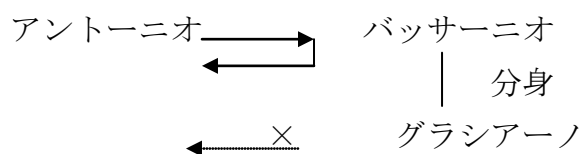
アントーニオと張り合うシャイロックにとっては、アントーニオは天敵である。アントーニオがユダヤ人差別の先鋒であるばかりでなく、彼が無利子で金を貸して、高利貸しの被害から人々を救い出すからだ。キリスト教社会においては、アントーニオは「道徳」の人であり、利害に囚われず他人に施しをする犠牲の人であり、寛容と愛の人、キリスト教の精神の人として、高い利子を取って金を貯め込む即物的なユダヤ人シャイロックと正反対の人である。アントーニオは自分が稼いだ金を他人のために惜しげもなく出費し、留保なく惜しまず与え浪費する。自分の財産を、危険に満ちた海の動きに任せる。この点で、憂鬱を抱えたアントーニオは既に、何でも浪費してしまう陽気で操的なバッサーニオの痕跡を帯びている。アントーニオは既に、出発点においてアンビヴァレントな存在である。

では、出発点の憂鬱は時間の中でどうなるのか？ぎりぎりのところまで追い

つめられた彼は、終わりにはしかし、シャイロックの財産の半分を管理することになっただけではなく、難破ですべてを失ったと思っていた船の一部が無事だったことが判明する。三艘の船が商品を搭載して入港してきたというのだ。こうしてアントーニオは、再び生きるエネルギーと生の幸福を取り戻す。冒頭の憂鬱から立ち直るのだ。すなわち、始めは二面性の一つである憂鬱に陥っていたアントーニオは、終わりにはもう一つの面である明るい側面に行き着いたのである。しかし、それでアントーニオが操的な存在になったわけではない。その側面が優位になっただけであり、ポーシャ＝バッサーニオ、ネリッサ＝グラシアーノ、ジェシカ＝ロレンゾーの結婚カップルの結末から一人取り残される者として、やはり憂鬱を逃れられないのである。裁判がなくても、アントーニオには、結末は最初から分かっていた。同性愛的であろうとなかろうと、アントーニオはバッサーニオに友情の限りを尽くすことで、ポーシャのもとに走る友人バッサーニオを失うからだ(指輪の罟)。後に見るように、シャイロック、バッサーニオ、ポーシャを始め、すべての主要な登場人物が変転(conversion)の運命にあるのである。

2-2.では、アントーニオの分身であるバッサーニオの成り行きとはどのようなものなのか?彼は、ヤヌスのもう一つの面を体現していた。何でも浪費することによって生を謳歌し、陽気で笑いが絶えない。浪費によって生の輝きを謳歌する彼は、最初は金の人として描かれているとあってよい。彼が登場して最初に吐く言葉は、*Good signiors both, when shall we laugh? say, when?* 「やあご兩人、また愉快にやろうよ。いつがいい?」(p. 15)。バッサーニオは、その陽気さを最後まで失うようには見えない。アントーニオが憂鬱から陽気さへと変化するのに対して、バッサーニオが憂鬱に転落することはない。それは何よりも、彼の分身であるグラシアーノによる。彼は、バッサーニオの性質をそのまま持っているが、それを「道化」にしたキャラクターだ。アントーニオが「自分は世界の舞台での憂鬱の役だ」という言葉を受けてグラシアーノは、*Let me play the fool* と言う。foolは「馬鹿者」と同時に、昔、王侯貴族のお抱え道化師をも意味する。日本では「太鼓持ち」のような存在で、身分は低いのに主人に何を言っても許されている存在である。

分身



バッサーニオはポーシャと結婚し、グラシアーノは侍女のネリッサと結婚することによってバッサーニオと同じ構造を支えることによって、陽気から転落しないことを保証する分身になっている。

しかし、バッサーニオのポーシャへの近づき方はどうだったのか？既に指摘したように、借金で首が回らなくなったバッサーニオは、美しく、かつ金持のポーシャに、自分の借金を清算するために結婚するという下心をもって近づいた。とんでもない奴である。第一幕第一場でバッサーニオはアントーニオに打ち明ける。

君もしらないはずはないよね、アントーニオ、ぼくが身代限りに落ち込んでいることは。あんな派手な見栄っぱりの生活を続けていたのではぼくぐらいの細々とした財産ではとてももたなかったのだよ。いまさら身分不相応な生活を切りつめるのに躊躇も未練もない、いまのぼくの第一の関心事は膨大な借財からきれいに足をあらうこと…… (p. 18-19)

ベルモントにだね、豊かな遺産に恵まれた女性がいる、美人だ、美人と言う以上に美人なのはその美しい人柄だ。[……] このぼくに彼ら[求婚者]と肩を並べるだけの資力があつたらなあ、ぼくには絶対ものにできる予感があるんだ、きっと幸運をつかみ取ってみせるとも。(p. 17-18, 20-21)

バッサーニオは、小箱選びゲームで首尾よくポーシャを射止めた。彼は、ポーシャを支配する者になったかに見える。彼女はこう言う。「そしてね、いちばんしあわせなのはね、喜んであなたのお指図に従おうとするやさしい心根なの。だってあなたはご主人であり、支配者であり、王さまなのですもの。わたくしのすべて、わたくしの財産、それは全部いまからあなたの所有になりました。たった今の今までわたしはこの美しい屋敷の持主だった、召使いたちの主人だった、わたし自身を統べる女王だった。でも今このとき、今の今、家も、召使も、そしてこのわたし自身も、全部あなたのもの、わたしの主人のもの (This house, these servants and this same myself/Are yours, my lord)。」

ポーシャはこう言ってバツサーニオを持ち上げる。しかし、すぐに彼女はこう付け加える。I give them with this ring; Which when you part from, lose, or give away, Let it presage the ruin of your love/ And be my vantage to exclaim on you. 「さあこの指輪と一緒に差し上げましょう。この指輪を手放したり、失くしたり、人にやったりしたら、それはあなたの愛の滅びたしるしよね。どんなに非難されようとあなたはなにも言えないのよね」(p. 108)。ポーシャは一方で、「あなたは主人」と持ち上げながら、「指輪を手放したら承知しないわよ」と脅して、結末の準備をしている。

男に変装して裁判に介入し、アントーニオを救ったポーシャは、提案されるお礼をすべて断わる。ただ一つ、バツサーニオの指輪なら受け取ると言う。バツサーニオは断り続けるが、遂に折れて指輪を渡してしまう。グラシアーノもそれに追随する。

先回りして家に帰っていたポーシャとネリッサは、アントーニオを連れて帰ってきたバツサーニオとグラシアーノとを迎える。そこで指輪がないと騒ぎだし、二人の男を問いつめる。愛の誓いを破った二人の完全な敗北である。こうしてバツサーニオは、ポーシャに支配される存在になってしまう。ということは、借金を返すためにポーシャを利用しようとした彼は、逆にポーシャの愛によって支配される存在へと転化してしまうのだ (conversion)。こうしてバツサーニオもアンビヴァレントな存在であることが分かる。金と銀の虚飾を退けながら、バツサーニオもまたポーシャの変装を見抜けず、外観に欺かれた。だからと言って、ポーシャが万能なのでもない。彼女は、バツサーニオが借金の返済のために、彼女の金目当てに求婚してきたことを見抜けなかったからだ。

2-3. アントーニオが鉛であり、バツサーニオが君臨する金を象徴するとすれば、シャイロックは銀の人である。バツサーニオが箱選びの場面で銀に対して吐く言葉にはこうある。thou pale and common drudge 「あくせく奴隷のように働く者」、'Tween man and man、「青白い顔で人と人との間をあくせくと走り回るやつ」(p. 102)。人と人との間を繋ぐ貨幣を象徴するシャイロックは銀なのだ。利子なしで金を貸すアントーニオにとっても、金を浪費し尽くすバツサーニオにとっても、従ってキリスト教にとっても軽蔑すべき貨幣、でありながら、ポーシャに近づくバツサーニオにとっても、ヴェニス¹の公爵にとっても必要な貨幣をシャイロックが体現しているのだ。必要な、ということは、キリス

ト教徒がユダヤ教徒に依存せずには存在できないということを示している。頼りながら軽蔑する、キリスト教徒はアンビヴァレンスの中で存在している。

シャイロックは、自分の命＝肉体＝娘（ジェシカ）と金＝財産と箱とを同一視している。彼は箱の中に、すべての財産をしまい込んでいるのだ。あらゆる点で、彼はアントーニオに対立する存在として描かれる。

シャイロック	アントーニオ
命に固執する恨み	命に未練のない憂鬱
肉体	精神
利子＝利害	無利子＝無利害＝無関心
文字＝証文	慈悲
銀	鉛

裁判に負けて財産を没収されることになったシャイロックはこう言う。慈悲を乞うたら減刑してやると言われて彼は、

Nay, take my life and all; pardon not that:
You take my house when you do take the prop
That doth sustain my house; you take my life
When you do take the means whereby I live.

いいや、命もなにもみんな取ってもらいましょう。

いまさらお情けなど結構。家を支える柱を取れば家を取るもおなじ、生きる手だてを奪えば命を奪うも同じ。(p. 161)

シャイロックにおいては、財産イコール命なのである。とはいっても、シャイロック自身もアンビヴァレントな存在である。最後に、強制的にキリスト教へと改宗させられるばかりでなく、アントーニオに利子をとらずに金を貸す時から、彼は敵であるキリスト教徒を真似るのだ。

第一幕第三場、借金の相談をする場面で、アントーニオはユダヤ人シャイロックをあからさまに罵倒し、「金を貸してくれるというなら、友人に貸すとは思うな、かりにも友情が、子を産まぬ金を友人に貸して、利息という子を取った

ためしがあるか」と吐き捨てる。それに対して、3,000 デュカは貸すが利息は
いらないとシャイロックは言う。「あんたと友達になりたい」ので、(I would)/
Supply your present wants and take no doit/ Of usance for my
money, . . . 「さし迫ってのご入用を用立てよう、しかもこの金にはりしは鏝一
文も取るまい、とこう決めているのに……」(p. 38)。そこで3ヶ月後、返済
ができない場合は肉一ポンドをもらい受けるという証文を、契約書を交わすこ
とにした。アントーニオはこう言っている。Hie thee, gentle Jew. [Exit
Shylock] The Hebrew will turn Christian: he grows kind. 「急
いでくれ、優しいユダヤ人。[シャイロック退場] キリスト教に改宗するのかな、
いやに親切だ」(p. 40)。利子をとらずにアントーニオに金を貸す彼は、自ら
をキリスト教徒に同一化する。それは、最後に裁判に負けてどん底に落とされ、
無理矢理キリスト教に改宗させられるシャイロックの運命を予告している。

シャイロックの出発点は差別されている状態である。ユダヤ人は、キリスト
教徒によって日常的に差別されている。素晴らしい人間と崇められているアン
トーニオは、シャイロックに向かつては悪口雑言を浴びせかける。「悪魔」「根
性の曲がった奴」「悪党」「贗物も立派な外観をしている」と言い、実際に唾を
かけ、犬呼ばわりする。しかも、これからもそうすると宣言する。ところが、
キリスト教徒が、自分が差別するユダヤ人に金を借りに来るところから、逆転
が始まる。シャイロックは、差別されている存在にまずは居直り、犬に友情を
求めることができるかとやり返す。ここでキリスト教徒は、相手をあからさま
に足蹴にしながら、金を貸してくれと頼むという矛盾をおかしている。最終的
には、バッサーニオとグラシアーノが、誰にも渡してはならないと約束したは
ずの結婚指輪を他人に譲ってしまうという矛盾をおかす。キリスト教において
は、結婚は神聖なものであり、結婚の誓いは絶対であるとすれば、この矛盾は
信仰上の罪でさえあるだろう。それに対してシャイロックは、常に論理を対置
する。彼の言動には合理性があり、彼が根拠にしている法に常に合致した合法
的なものである。ヴェニス法にも、神の法にも。利息を取るのも、ユダヤ教
の法によって許されていることを証明する。「金に子供を生ませる (breed)」
のだ。ここから金と子供—ここでは娘ジェシカーとの同一視が生じる。それが、
キリスト教徒の差別に対する復讐心を高めるのだ。

出発点における日常的な差別構造の中で、アントーニオに対するシャイロッ
クのライヴァル心、従って復讐心は常に既に醸成されている。そして、キリス

ト教徒を真似て、アントーニオと同一化することによってシャイロックが無利子で金を貸す時、全体構造の変転は既に動き出している。だが変転が決定的に動き出すのは、召使いのランスロットがシャイロックを捨ててバツサーニオの許に走り、次には、借金のお礼にとバツサーニオの夕食への招待を受け取ったシャイロックが、何かが起こるといふ不安を抱えつつ「嫌々」招待に答えて、異教徒との食事をともにしないという原則を破ってシャイロックが一線を越えること、そして同時に、その留守中に、彼の予感が的中する形で、娘のジェシカがキリスト教徒ロレンゾーの許に、一線を越えて走ることによって決定的になる。

差別の構造は、二つの出来事によって強まる。第一に、豊かなユダヤ人シャイロックの許を、召使いのランスロットが離れ、貧乏なバツサーニオの許に走ること。第二に、決定的なのは、娘のジェシカが、彼の財産の一部を箱ごと盗んでキリスト教徒ロレンゾーの許に走ること、である。（「駆け落ち」の時、ジェシカは男に変装している。）彼にとっては、金も娘も同じものなのだから、彼は憎きキリスト教徒によって自分の命の一部を奪われたのだ。アントーニオに対する復讐心は止めどなく高まって行く。町中を歩きながら嘆き悲しむ様を、ソラーニオが嘲笑しながら伝えている。

"My daughter! O my ducats! O my daughter! Fled [flee 逃げる] with a Christian! O my Christian ducats! Justice! the law! my ducats, and my daughter! A sealed bag, two sealed bags of ducats, Of double ducats, stolen from me by my daughter!"

「おれの娘、おれの金貨、おれの娘、キリスト教徒と駆け落ちした金貨二袋、ああ、二倍の値打ちの金貨だ、娘に盗まれた [……] (p. 79)。

差別されつつ、金を儲けることで何とか持ちこたえてきたシャイロックは、キリスト教徒ロレンゾーに娘＝金を巻き上げられることで、眼には眼を、歯には歯を、の論理でそれを埋め合わせようとする。復讐である。

この復讐心が、シャイロックの冷徹な議論を狂わせる。もはや、冷徹な計算も（例えばバツサーニオが借金の2倍の6,000デュカを返すと言っても耳を貸さない）、この先の生活を考慮して行動を決める理性（ratioとは計算理性である）も失って、ひたすら金よりも肉を求める。裁判が始まる時点で、ヴェニス

の公爵がシャイロックに、「お前の頑なな態度も最後には慈悲の心が変わってアントーニオを赦すことになる」と言うのを否定して、シャイロックは、証文通りにアントーニオの肉一ポンドを要求する。その時の台詞にはこうある。

You'll ask me, why I rather choose to have
A weight of carrion flesh than to receive
Three thousand ducats: I am not answer that:
But, say, it is my humour: is it answer'd?

[……]

So can I give no reason, nor I will not,
More than a lodged [宿す] hate and a certain loathing [嫌悪]
I bear Antonio, that I follow thus
A losing suit against him. Are you answer'd?

さあてな、なんでまた三千デュカもの金を
捨ててわずかの重さの腐れ肉を

ほしがるとか。さあて返事はなんといたしましょうかな。

さよう、ただの気まぐれ、と、これでよろしゅうございますかな？

[……]

ま、わたしの法もわけは

申せませんし、申し上げる気もございません。さようですね、

強いて申せば宿怨でしょうかな、アントーニオへの

積もる憎しみ、それでみすみす大損承知の訴訟を

起こしましたようなわけで、ご返事はこれでよろしいかな。(p. 138-139)

こうしてシャイロックは、日頃蒙ってきた差別を逆転させ、キリスト教徒が感じてきた優越を感じるのだ。立場が入れ替わる。それと同時に、即物的な3,000デュカという金銭ではなく、何の役にも立たない「腐れ肉」を要求することによって、シャイロックは自分の残酷な「精神性」も証明して見せる。まるでユダヤ人に残酷なキリスト教徒のアントーニオになったかのようだ。第三幕第一場でのシャイロックの捨て台詞は、そのことを示している。アントーニオが自分をいじめるのはなぜだ、と問うてシャイロックはこう続ける。

I am a Jew! Hath not a Jew eyes? hath not a Jew hands, organs, dimensions, senses, affections, passions? fed with the same food, hurt with the same weapons, subject to the same diseases, healed by the same means, warmed and cooled by the same winter and summer, as a Christianis? If you prick us, do we not bleed? if you tickle us, do we not laugh? if you poison us, do we not die? and if you wrong us, shall we not revenge? If we are like you in the rest, we will resemble you in that. If a Jew wrong a Christian, what is his humility? Revenge. If a Christian wrong a Jew, what should his sufferance be by Christian example? Why, revenge. The villainy you teach me, I will execute, and it shall go hard but I will better the instruction.

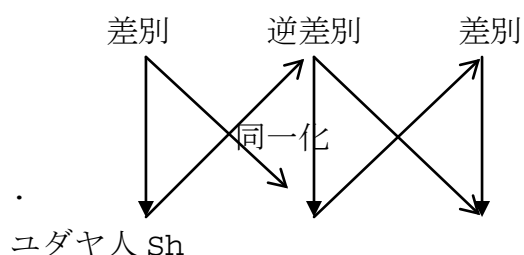
おれがユダヤ人だから。ユダヤ人には目が無いっていうのか、手がない、五臓六腑がない、四肢五体がない、感覚がない、感情がない、情熱がないっていうのか。同じ食べ物を食べ、同じ刃物で傷つき、同じ病気にかかり、同じ治療で治る。冬は同じに寒いし、夏は同じに暑い、違うか。キリスト教徒と違うのか？おれたちだって刺されれば血が出る、くすぐられれば笑う、毒を盛られれば死ぬ、え、違うっていうのか？じゃおれたちを痛めつけたら復讐しないとでも思うのか？ほかみんな一緒なら復讐だって一緒だ。ユダヤ人がキリスト教徒を痛めつけたらキリスト教徒の寛容とやらはどうなる？復讐だ。じゃキリスト教徒がユダヤ人を痛めつけたら、キリスト教徒のお手本にならってユダヤの忍耐はどうなる？もちろん復讐だ。教えてくれた悪の手本をこっちも実行するまでだ、そうとも、せっかくのありがたい教えだ、先生以上になりっぱにやってみせるとも [必ずや改良する]。(p. 93)

ユダヤ人差別を告発し、「人間」としての平等を主張する、この一見して感動的なヒューマニスティックな言説として評価されることの多いこの一節はしかし、シャイロックのキリスト教への同一化として読む必要がある。復讐という同一化である。ユダヤ人だってキリスト教徒と同じだと主張することによってシャイロックは、ユダヤ人をキリスト教化し、キリスト教徒をユダヤ人化しようとする。お前たちキリスト教徒が教えてくれた復讐をキリスト教徒に向けること

によって、ユダヤ人と同じ運命を味わわせてやる。ただし、愛と慈悲によってではなく、「眼には眼を、歯には歯を」の原則に従ってである。

しかし、この復讐心はシャイロックを逆上させ、彼から冷徹な論理を奪ってしまう。だからこそ、ポーシャが仕掛ける罠にはまってしまうのだ。最後には、徹底的な侮辱を受け、キリスト教徒に強制的に改宗させられる。強制的に同一化させられるのだ。破滅である。

キリスト教徒 A, B



こうしてシャイロックも二重の顔を見せる。アンビヴァレンツである。

シャイロックの二重の顔の大幅な揺れを可能にしているのが娘のジェシカである。彼女はユダヤ人でありながら、文字通りキリスト教に改宗し、キリスト教徒ロレンゾーと結婚する。娘は父親の分身であり、また金とも同一視されていた。それがキリスト教徒に奪われるにいたって、シャイロックの復讐心が燃え上がり、われを忘れさせたのだ。

キリスト教徒への復讐が失敗し、キリスト教の「慈悲深い」判決によって、シャイロックの死後、彼の財産の半分はジェシカ夫婦に残されることになった。しかし、ジェシカが幸福なはずはない。ユダヤ人である自分の存在を、父親への暴力によって否定されたからだ。また父親から逃げるだけでよかったのに、父親が叩きのめされたからだ。ユダヤ人であることとキリスト教徒との間、幸福と悲しみの中で、ジェシカは揺れ動くしかないのである。

2-4. この作品には、死んだ父親の遺言で、ベルモントに閉じこもっていたポーシャを、結婚という形でそこから連れ出すためのルールが敷かれていた。それが金銀鉛三つの小箱を選び、箱の中にポーシャを描いた絵が入っている時に、彼女の夫になれるというものである。こうして父親から莫大な遺産を引き継いだポーシャは文字どおり「箱入り娘」であり、自分を箱から外に連れだし、自

由に羽ばたくことを可能にする男性を待っている。あまたの求婚者がいて小箱選びに失敗しているらしいというコンテクストを背景に、金の箱を選ぶモロッコ大公が失敗する。次には、銀の箱を選ぶアラゴンの王が失敗する。

ポーシャの方は、父親の遺言で何も自分では選べない状態に綴じ込まれている。彼女は、選ばれるという受動の立場を呪っている。彼女が登場する時の台詞はこうだ。

まったくねえネリッサ、わたしのこの小さな体はこの大きな世界にくさくさしているの (By my troth, Nerissa, my little body is a-weary of this great world.). (p, 22)

最後には安堵し、明るくなりながらも憂鬱は抜け出せないアントーニオとは異なり、あたかもその憂鬱に対応するかのようなポーシャの疲れは、バツサーニオによって晴らされ、ベルモントを超えた大きな世界の中で活躍しうようになるのだ。

従って、出発点においては、ポーシャは父親の遺志に縛られ、いわば箱の中に閉じ込められている「箱入り娘」である。

ああこの「選ぶ」って言葉！わたしはねえ、好きな人も選べなければ、嫌いな人も拒めない。いま生きている娘の意志の望みが死んだ父親の遺書の望みに縛られるだなんて。(p. 23)

この束縛から彼女を解放するのがバツサーニオである。議論を先取りして付け加えておこう。ポーシャは大金持ちである。しかし、その貨幣は世界を流通していない。貨幣の死蔵である。ところがバツサーニオには借金がある。だから、結婚後はその借金を支払うことによって、次には、実際には支払われなかったアントーニオの身代金としてポーシャの下を離れ始めるのだ。

さて、死んだ父親の意志とは、金、銀、鉛の三つの小箱が準備してあり、求婚者はその一つを選んで、中からポーシャの肖像画が出てきたら、その人と結婚するというものである。金の箱には「我を選ばん者、諸人の欲するを得べし」との銘が刻んであり、銀には「我を選ばん者、分相應を得べし」と、鉛には「我を選ばん者、持てるすべてを賭すると知れ」と刻んである。小箱選びの儀式は

そのまま実行された。

まずはモロッコの王。彼は、誰でもが欲する光り輝く美女には金属の最高峰、金が相応しいと推論し、金の箱を選ぶ。箱を開けてみると、中には巻物が入っていて「光るものすべて金ならず」という文章が失敗を宣言する (p. 77 引用)。次はアラゴンの王。金の銘「諸人の欲する」を大衆の欲するものと解釈し、銀の銘「分相応を得る」という、自分がポーシャの結婚相手に相応しいと解釈して銀の箱を選ぶ。開けてみると、出てきたのは「阿呆の頭がウィンクして」巻物を差し出している。「お前には阿呆が分相応」と失敗を言い渡す (p. 86-87 引用)。最後に、ポーシャ自身が選ばれることを望んでいるバツサーニオである。「うん、外観が中身とまるで異なるということもある。世間は常に虚飾に欺かれる」と言う彼は、「持てるすべてを賭する」危険を顧みず鉛の箱を選ぶ。開けてみると、ポーシャの肖像と巻物があった。賭けに勝ったのだ。巻物には「外観によって選ばざりし汝」を讃える言葉がある (p. 106 引用)。

何が問題なのか？モロッコの王とアラゴンの王とは、金属そのものに意味があると思いついたところに間違いがある。モロッコの王は金こそポーシャに相応しいと、アラゴンの王は銀こそ自分に相応しいと解釈した。「相応しい」とは、何かの性質だという意味である。「ポーシャは金である」「私は銀である」。バツサーニオは、金や銀と比べたら何ものでもない鉛そのものには意味がないことに気がついた。金や銀が貨幣として流通していた当時、貨幣にはそれ自体で価値があると思われていた。貨幣とはしかし、今日の紙幣や電子マネーを見るまでもなく、その素材が重要なのではない。何でもいからこそ、貨幣は他の商品に関係することができる。ここでは、それ自身何ものでもない鉛だけが他のもの、すなわちポーシャ（商品）に関係しうるのだ。後に見るように、ポーシャという存在は貨幣として、この世界に君臨して行く。貨幣が作り出す資本主義の世界は、それ以前の古い社会関係を、友情も、ポーシャとシャイロックのところに貨幣が死蔵されている状態もことごとく打破して、すべてを流通の中に呑み込んで行くのである。それとともに、登場人物たちの運命も変転して行かざるをえない。

ここで「箱入り娘」であったポーシャと召使いのネリッサは、バツサーニオとグラシアーノによって解放された。船を派遣して海洋貿易をするアントーニオと同様に、ポーシャを求めてヴェニスからベルモントに船出するバツサーニオとお付きのグラシアーノは、友情の自由な世界を離れ、結婚という「墓場」

に閉じ込められる。

2-5. もう一人の「箱入り娘」がいる。シャイロックの娘、ジェシカである。既に引用したように、シャイロックにとっては娘と貨幣とは同じものである。ロウるさい父親に行動の自由を奪われ、家に縛り付けられている。彼女にとって、この家は地獄」(p. 58)であった。召使いのランスロットが止めて出て行く場面でジェシカはこう言っている。

さようなら、ランスロット。
ああ、ほんとにひどいわたしの罪、
お父さまの子であることを恥じるなん。
でもね、血はお父さまから受け継いではいても、
心は違うの。ああ、ロレンゾー、
どうか約束を守ってね、わたしの苦しみはこれが最後。
いよいよ晴れのキリスト教徒、あなたの愛の妻。(p. 59)

キリスト教社会の仮面舞踏会の夜であった。シャイロックはバスサーニオに、金を貸してくれたお礼だといって晚餐に招かれる。「好意から呼ばれたのではない。ただの機嫌取りさ」と言い、ジェシカに留守を頼むが、「どうも行く気がせん、じつは昨夜金袋の夢をみた、わしの心の平安をかき乱すなにか変事が起こりそうな気がする」(p. 62)と、悪い予感を覚えつつ出かける。差別され、自分が嫌っているキリスト教徒の、一種の挑発である誘いに乗って、「敵意をもって」一線を越えたことが、彼の運命を変える切っ掛けになる。予感は的中した。確かにそれは罠であった。留守中にジェシカがロレンゾーと駆け落ちする計画が張り巡らされているからだ。

松明をもつ男性に変装して待っていたジェシカは、父親の金袋をもって、迎えに来たロレンゾーと、闇に紛れてキリスト教徒の社会へと駆け落ちした。

男性に変装した女性、そればかりでなくユダヤ人社会とキリスト教徒の社会の境界線を越えて二つの社会を関係づける、媒介するポーシャ（法律学者）とジェシカ（松明を持つ男）とは、ともにトリックスターである。

ジェシカとともに移動するのは、シャイロックが貯め込んだ貨幣と宝石でもある。事実を知ったシャイロックが半狂乱になって「おれの娘が！おれの金が！

おれの娘が！」と叫ぶのは既に読んだ。娘と金とはイコールなのだ。それはシャイロックの理解であるとともに、この作品を形成している本質的な等式である。シャイロックのところに死蔵されていた貨幣が、境界線を越えて流通し出すのである。

2-6.アントーニオが派遣していた船が難破し、積み込まれていた商品がなくなってしまう。バッサーニオのために、アントーニオがシャイロックから借りていた金が返せなくなってしまう。戯曲の最も有名な場面、裁判である。

借金した時に交わした証文には、「借金が返済できない場合、アントーニオの身体の肉の一ポンドをシャイロックが得る」と記してあった。裁判になった。アントーニオの側も、ヴェニス最高権力者で裁判長である公爵も、キリスト教的な「慈悲」(mercy)の「精神」に訴えてシャイロックを宥めよう、懐柔しようとの方策に出る。しかし、シャイロックは証文という文字の法的効力を主張して譲らない。もうアントーニオは、シャイロックの復讐を甘んじて受けるしか選択肢がなくなる。友情から、ポーシャの金をもって支払うという提案も、シャイロックが拒否する限り裁判においては公式の効力はない。アントーニオは、死を覚悟してバッサーニオにまたしても友情の確認を求める。(同性愛的?)友情で生きてきた人間である。そのアントーニオは、友情ゆえに死を迎える、すなわち友情の関係を終わらせる「バッサーニオの船出」を友情によって支えたアントーニオの最後の言葉である。「君は友情を去っても、友情の記憶だけは残して欲しい」という語りかけである。

バッサーニオ、最後の握手を。さようなら。

君のためにこんな事態になったことを悲しまないでくれ。

……

君の立派な奥さんにどうかよろしく、ついでにアントーニオの最期の様子も伝えてくれ、君をどれほど愛していたか、死んだらせいぜいほめてくれた上で、それで話し終わったら判断してもらうんだね、バッサーニオに親友があったかどうか。君が友人を失うのを悲しんでくれさえすれば、その友人は君の負債を支払うのを悲しみはしない。(p. 154)

それを受けてバッサーニオは友情の言葉で、こう応える。

アントーニオ、ぼくには結婚した妻がいる、
ぼくには命にも代えがたい大切な人だ。
だが命も、妻も、この世のすべても、
今のぼくには君の命以上に尊くはない。
君を救うためなら、なにもかも捨ててもいい、
いや、この悪魔に全部を犠牲に捧げたっていい。

それを聞いたポーシャがすぐに反応する。

そんな犠牲の話をおさんがそばで聞いていたら、
ま、あんまりありがたいとは思わんでしょうな。(p. 155)

要するに、ここでは既に、友情と夫婦関係とは両立しないものになっているのだ。アントーニオは、バッサーニオに対する友情から行動しつつ友情を失う。友情は過去のものになる。冒頭の「まっ暗」から危機を経て明るい結末を迎えるのだが、やはり憂鬱から解放されることはない。結婚という「墓場」に捕らえられたバッサーニオとグラシアーノもまた、それまでのように、友情を頼りに自由に遊び回ることはできなくなったのである。この裁判については、キリスト教の「愛」との関係で、もう一度立ち戻ることにする。運命の変転はとどまるところを知らない。

シャイロックの方は証文の文字に拘るがゆえに、男性法律学者に変装したポーシャに引っかけられて敗訴する。彼は裁判中、「証文とおり」という言葉を反復する。裁判を取り仕切る公爵も、後にはポーシャも「慈悲」(mercy)をシャイロックに要求する。彼の「証文どおり」というシニフィアンは、この「慈悲」というシニフィアンとの対立の中で、シャイロックの復讐心を支えている。

自分の泥は自分でかぶる。法律通りに願いましょう。証文どおりの罰金、違約金を頂戴いたしましょう。(p. 149)

証文の文言どおりの支払いがすみましたらな。[……] さあ、証文どおりだ。
(p. 151-152)

証文にそうある、さようすな裁判官さま、「心臓の間近」、これが正確な文言ですな。(p. 152-153)

この「証文どおり」が反復される間に、アントーニオが追いつめられて行く。その極限で大逆転が起こるという構成は、この場面を見事なサスペンスにしている。シェイクスピアの才能のすごさを見せている。

同じ言葉は繰り返されうる。繰り返されるということは、異なるコンテキストで繰り返されることだ。異なるコンテキストで反復される同じ表現は、別の意味をもちうる。シャイロックはこの言葉を、キリスト教の慈悲に対する復讐という意味しかもたないと思いつめていた。復讐心のために「我を忘れて」いたからだ。そこに隙があった。ポーシャは「証文どおり」を確認して、その言葉を奪い取り、シャイロックに投げ返す。「血は一滴も流してはならない」と。その判決に啞然とするシャイロックは、「それが法律で？」と聞き返している。そうだ。だが、具体的なヴェニス法律ではなく、言語の法である。一つの言葉が一つの意味に固定されていないのが言語であり、言語は自分のものにだけできるというのは幻想である。言語は常に他者の言語である。

判決の結果、金持ちのユダヤ人であることさえ許されず、破滅の道を進むことになる。強制的なキリスト教への改宗 (conversion) であり、運命の変転である。ところが、変転は個人の運命にとどまらない。それは、描かれている二つの共同体そのものが解体するという変転でもある。

アントーニオの商売は、船で遠隔地へ出向いて、現地の香辛料を始めとする品物を買付け、ヨーロッパに戻ってきて品物を売るというものであった。コロンブスの航海が開いた植民地経済というシステムである。現地の人々は、ヨーロッパ人が買う品物の「価値」を理解していないし、ヨーロッパでそれを買う人々も「価格」が適正なのかどうかの判断基準をもっていない。その隙間を利用して設けるのが商業であった。安く買って高く得る、それが隙間産業としての商業だったのだ。そこに経済的な「フェア」 という基準はない。現地においては一種の「盗み」と、ヨーロッパにおける一種の「詐欺」の論理の組み合わせであった。

そのアントーニオが、他人に金を貸す時には利子をとらないというのは、実は旧約聖書の中にあり、キリスト教であれ、ユダヤ教であれ、同じ原則であった。描かれているキリスト教社会は「友情」に基づいた共同体であり、アント

一ニオは儲けを貯め込むことに走らず、儲けを共同体に配分する。それは、金を貯め込むことをせず、教会に寄付することによって、貧しい人々に再配分するという発想である。今日でも、とりわけアメリカで盛んな「ヴォランティア」活動と寄付の伝統は、キリスト教の発想から起こっている。アントーニオの共同体は、金を持っている人間が金を出す、友情の共同体として描かれている。

それに対して、シャイロックが「高利貸し」をして金を儲けているのは、キリスト教徒を相手にしている。差別しながらも、キリスト教徒はユダヤ人を当てにしていたのだ。それは、シャイロックが裁判で主張する「証文どおり」、すなわち「等価交換」という原則に従っていた。キリスト教共同体には欠けていた原則である。

ところが、ポーシャの媒介で両者が解体され、新たな論理が走り出す。それは貨幣の一般的な流通を原則にする資本主義である。ユダヤ人社会には、この作品では、「慈悲」が与えられた。というより押しつけられた。逆に、キリスト教社会の経済活動には、等価交換（「証文どおり」）という原則が贈られた。ここで、フィクションの上でだが、等価交換と慈悲とが結びついたのである。ここで初めてキリスト教が資本主義を生み出すことになった。ということは、資本主義がキリスト教と結びついたということに他ならない。

2-7. 小箱選びで首尾良くバツサーニオに射当てられ、あるいは逆にバツサーニオを射当てたポーシャは、直後にこう言っている。

バツサーニオさま、わたくしはあなたのご覧のままの、
ただそれだけの娘でございます。わたくし一人のためでしたなら、
これ以上の自分を望むなど、
そんな高望みはいたしません。でも、
あなたのために、今のわたくしよりも百倍も立派でありたい、千倍も美しくありたい、万倍も財産家でありたい、……。 (p. 107-108)

ポーシャはもともと大金持ちである。バツサーニオは自分の借金を清算し、それ以上の富を自分のものにしようという不純な動機から求婚者になった。「人柄が素晴らしい」とアントーニオに言う台詞は既に読んだが、その時点ではバツサーニオはポーシャを利用しようとしているとしか読めない。ただ、一つ確か

なことは、バツサーニオがポーシャの金を外部で使うということだ。

それと同時に、ポーシャとは貨幣の象徴である。ベルモントに閉じこもっていた彼女は、バツサーニオと結婚したがゆえに、裁判へと出かけていって活躍する場を獲得する。しかも、伝統的なキリスト教社会とユダヤ教社会を変質させる存在としてである。

貨幣とは、それ自体では関係をもてない物と物とを関係づける交換させる媒介であるがゆえに、特定の物から自由に抽象的で一般的な価値測定の役を演じる。あらゆる物に交換可能であるがゆえに、欲望を個々の物から解放する。自己増殖することを目的とした貨幣を資本という。

ポーシャは、小箱選びの結婚ゲームに縛られてベルモントから外に出られない存在であった。彼女が莫大な資産の相続者として、お金を死蔵しているが、それを使うこともできなかった。そこに、生を謳歌するために浪費を重ねて破産寸前になっていながら、遠隔地貿易をするアントーニオの分身であるバツサーニオが、借金を支払うための貨幣を手に入れるためにやって来た。彼は、借金を返すために、遠隔地で商品を安く買って、戻って高く得るアントーニオと同じく、しかし逆方向に、「愛」という商品をポーシャに売って、彼女の貨幣を手に入れ、戻って借金を支払う「ヴェニスの人」となって船出して、ベルモントに辿り着いたのである。バツサーニオは首尾よく貨幣を手に入れる。しかし、この先、商売をするわけではないから、バツサーニオがアントーニオと同じ「商人」になったわけではない。彼は、むしろ結婚によってポーシャという貨幣を手にした資本家になったのだ。

資本家というのは、自由に金を使える金持ちという意味ではない。資本家とは、どうしたら手持ちの貨幣が自己増殖できるのかという論理に従属する人である。貨幣の方が、資本の方が資本家に行動を命じる。資本家は資本の声を聴き、それに支配されるのだ。従って今や、資本家バツサーニオの保証人アントーニオの境遇という危機をチャンスに、自己増殖する貨幣、すなわち資本としてポーシャが自己運動を始める。

金をもたせて、アントーニオの裁判にバツサーニオとグラシアーノ駆けつけろと言って二人を送り出したポーシャは、すぐに自分も出発する。召使いに、知り合いのベラーリオ博士への手紙と返答を運んでくれるように頼んで、送り出してから、ネリッサにこう言って出立する。すぐに動き出すのである。

いい、ネリッサ、まだお前に話していなかったけど
これからひと仕事あるの。亭主たちに会いに行きましょう、
二人には気づかれないようにして(we'll see our husbands
Before they think of us)。(p. 127)

結婚式の時には、my Lord「陛下」「閣下」とも訳すべき最高峰の敬語を使って
バッサーニオを持ち上げていたポーシャは、時間的には結婚式直後の状況の展
開に対応して、すぐさま「私たちの husband」と言っている。「亭主」と訳さ
れているように、もう表現が変わっている。バッサーニオに金を手に入れる下
心があったとすれば、ポーシャにももともと、納得できる結婚相手を利用して
自由な動きをしたいという下心があったと見なしてよい。

結婚式でのポーシャは、バッサーニオにこう言っていた。

……ただもう

あなたのためだけに、わたくしはね、今現在の全部を
計算したところでほんのわずか、全額を申し上げれば
教養のない、躰のない、経験のない、ただの小娘です。
でもね。しあわせなことにまだ若いのだからこれから
いくらでも学べます。それよりもっとしあわせなことに、
学んで覚えられないような愚かな生まれではありません。(p. 108)

「教養のない、躰のない、経験のない、ただの小娘」と思いっきり謙っておい
て、「学べる」という可能性をほのめかしているが、しかし、結婚式直後のネリ
ッサとの旅立ちの時には、もうベラーリオ博士の助言を得て裁判を仕切る自身
があるのだから、今読んだ台詞はほとんど嘘である。バッサーニオに対する単
なる外交辞令であることが分かる。今や、アントーニオとバッサーニオの危機
を利用して、自ら羽ばたける時が来たと判断したのである。

ネリッサに「亭主たちに会いに行きましょう」と言うポーシャは、続けてこ
う言う。ネリッサの質問から引用する。男性への変装にまつわる台詞である。
ここでにわかに、女性の会話に性的な言葉が現われる。

ネリッサ でも顔を合わせるんでしょう？ (Shall they see us?)

ポーシャ 会わせたって大丈夫 (We shall)、こっちは男の服装でいくから、女の子にないものもちゃんとくつついているって向うじゃ
思い込むでしょうよ (but in such a habit, /That they shall think we are accomplished /With that we lack)。

直訳してみよう。「彼らが、われわれは、われわれに欠けているものを備えていると想うような身なりに」となる。間接表現になってはいるが、ここで「われわれに欠けているもの」とはペニスのことだ。(ただし、女性が「われわれに欠けている」という表現は、男性中心主義社会の価値判断を、女性が追認したものである。)

いくつか男性の行動を真似る例を挙げてポーシャは、こう台詞を締める。ネリッサの反応とともに引用する。

ポーシャ ……空威張りの男連中のそんな手口なら、それを
ひとつひとつやってみましょう (A thousand raw tricks of these bragging Jacks, /Which I will practise)。

ネリッサ きゃあ、本当にやりたい (Why, shall we turn to men?)

ポーシャ あーらいやだ、そんないやらしい声で、「やる」だなんて。
だめよ、あっちの方取るひとだっているんだから (Fie! what a question's that, /If thou wert near a lewd interpreter!). (p. 128)

bragging は「自慢すれる」という現在分詞、jack は「男、やつ」といった卑語、A thousand raw tricks of these bragging Jacks, /Which I will practise. 「私が実践するこれら自慢する奴らの一千もの粗野な手口」という名詞文である。why は、ここでは翻訳者は間投詞で「あら、おや」という反応、turn to は「なる」つまり become である。Why, shall we turn to men? 単純に「私たち男になるの？」で十分であろう。そうなら「本当にやりたい」は絶対におかしい。となると次の文も変だということになる。Fie は、軽蔑を表わす間投詞、「それはなんて質問でしょう」、thou は今日の you、wert は、be 動詞の thou を主語とした仮定法過去、lewd は「みだらな、卑猥な」という形容詞、interpreter は「解釈者」や「通訳」を表わす。とすれば、この一文は、

「お前がみだらな解釈者・通訳の近くにいたら、それはなんて質問でしょう」という意味で、大場さんの訳文とはかなり違う。なぜ、このような翻訳をしたのかは分からない。「やってみましょう」を受けて、「やってみて男になるの?」「やってみて一人前の男になるの?」「まあ、なんて質問。みだらな解釈者のそばにいたら [大変よ]」ほどであろう。

男性へと変貌し (convert)、女性として普段男がやっていることを男相手に返すことで、ポーシャは古いキリスト教世界とユダヤ世界とを交流させ、自らが貨幣として新たな貨幣の王国、すなわち新たな資本主義を普遍化させる。人物としての彼女は、指輪以外に何も稼いではいない。だが、貨幣としての彼女は、ジェシカとロレンゾーに、シャイロックが死蔵していた財産の半分を与えた。ジェシカが持ち出して使った金よりはるかに多額の貨幣を流通させることになった。すべてはポーシャの、つまり貨幣の一人勝ちである。鉛の箱に閉じ込められていた彼女は、世界を飛び回る「金」として世界に君臨することになったのである。

2-8. 小箱選びに登場したバツサーニオは、初めてポーシャと言葉を交わす。以前に私は、ポーシャには彼の下心を見抜けなかったと言った。しかし、この初めての会話には、バツサーニオを完全に信頼しているわけではないことも匂わせている。

バツサーニオ 選ばせて下さい。

このままでは拷問台に乗せられたままだ。

ポーシャ あら拷問台? じゃ白状なさいな。

あなたの愛にはきっと裏切りの謀反が潜んでいるのね。

バツサーニオ 謀反ならばただ希望を醜く裏切る不安の心、

あなたの愛を得られるかもしれぬという。

このわたしの会いに謀反の裏切りなどあるものか、

雪と火とがけして手を取り合うことなどないように。

ポーシャ それはね、拷問台が言わせた言葉じゃないこと、

拷問台の上なら心にもないことをしゃべってしまいそうだから。

バツサーニオ 命を助けて下されば真実を申し上げます。

ポーシャ では命を取らせる、ささ、白状するか。(p. 98-99)

ここには、二つのことが見て取れる。第一に、ここであたかもポーシャが、「金目当て」という下心を見抜いているかのうようだという事。第二に、この場面が裁判というよりは、警察での取り調べを模したものになっている事。第二の点は、後の指輪をめぐるミニ裁判を予告している。第一の点は、たとえバツサーニオが、始めは下心をもって自分に近づいて来たのだとしても、形勢を逆転し、文字どおり自分の「虜」にする自身を窺わせる。

小箱選びにバツサーニオが勝利し、首尾よく結婚が成立した時、ポーシャは彼に指輪を贈る。「さあこの指輪と一緒に差し上げましょう。この指輪を手放したり、失くしたり、人にやったりしたら、それはあなたの愛の滅びたしるしよね。どんなに非難されようとあなたはなにも言えないのよね」(p. 108)。バツサーニオはそれに、「……この指輪がこの指から離れることはありません、命がこの世から離れぬ限り、そのときはどうか宣言して下さい、バツサーニオはしんだと」(pp. 109-110)と見得を切っている。ここでは、ポーシャ＝貨幣＝指輪の等式が成り立つ。3000 デュカの金額とアントーニオの命の等価交換を記した証文と同じように、ここではポーシャが与えた指輪とバツサーニオの命の等価交換の契約がなされたのだ。

ところが、船が難破して借金が返せなくなったアントーニオと同様、バツサーニオは、法律博士に扮したポーシャに、裁判に勝利したお礼に指輪を要求され、しぶしぶ応じてしまう。ベルモントに帰って祝賀パーティが開かれるが、その中で、ポーシャとネリッサが指輪がないと言いがかりをつける。これは、シャイロックがアントーニオを訴えた裁判の喜劇的反復である。とはいえ、分裂したユダヤ教、キリスト教の対決ではなく、既に結婚した間での喧嘩である。ここでも、法律博士が実は自分だったと打ち明けるポーシャによって離婚の危機は回避されるが、しかし、勝者はやはりポーシャであった。指輪がポーシャからバツサーニオへ（これは彼女がバツサーニオの支配の下にあることの象徴である）、バツサーニオから変装したポーシャへ（これはアントーニオの命と指輪の等価交換であった）、さらにポーシャからバツサーニオへと流通することそのことが、最終的にはポーシャがバツサーニオの支配者であり、もはやバツサーニオの支配下で死蔵される貨幣ではなく、流通する貨幣になったことを認めさせるという効果を生む。それによって、当初は金目当てに結婚し、従来通りの女性に対する男性支配を反復しようと思っていたバツサーニオの思惑は覆り、バツサーニオはポーシャの軍門に下る。その意味では、指輪をめぐることの「裁

判」は、ユダヤ人シャイロックを破滅させ、キリスト教の勝利を確立する裁判の単なる反復ではない。

ここでは具体的な金銭的利益が生まれることはない。しかし、新たな形で更新された夫婦の結びつきは、やがて子どもという利潤を生むことになるだろう。最期の場面が、夫婦たちがベッドインへ向かうことを描いているのは決して偶線ではない。

出発点においては、浪費家のバッサーニオは金であった。お金を死蔵するシャイロックとポーシャとジェシカは銀、憂鬱なアントーニオは鉛であった。すべてが一巡した後は、ポーシャ金になり、バッサーニオは憂鬱な鉛になる。アントーニオは出発点の鉛から銀になりつつ最後には鉛のままに遺される。シャイロックにいたっては、出発点にいおける銀からアントーニオに同一化することで、鉛以下になる。貨幣経済の外へ追放される。もはや何ものでもない。その娘は父親の金を持ち出し、自らも金となってユダヤ教共同体を抜け出しキリスト教徒になる。しかし、父の破滅に手を貸すことになり、父の悲劇を引きずる彼女は、そして彼女と結婚したロレンゾーは憂鬱な存在になった。

全体的な conversion、変転、転回は、社会構造そのものを変えるために、登場人物たちの運命も、出発点の金属とは意味を変えることになる。社会構造の変化とは、キリスト教徒によって差別されている高利貸しのユダヤ教社会と、キリスト教徒の兄弟的共同体とが分離した状態から、等価交換を基本にして資本主義がキリスト教のものになったことだ。シャイロックの没落とともに、ユダヤ人もまた、ユダヤ人特有の高利貸しであることを止め、ユダヤ人も資本主義に参入すると同時に、キリスト教徒も高利貸しを始めることになる。利子をとる/とらないという共同体の対立と分節が崩壊する。資本主義は、自己の論理を貫徹するために、古い社会秩序と古い倫理を次々に葬り去る。自由の名の下にである。高利貸しユダヤ人と利益を溜め込まないキリスト教徒との対立が消滅するのである。キリスト教徒を怨み、キリスト教徒に復讐しようとするシャイロックの没落である。ただしそれは、キリスト教徒の兄弟社会の消滅でもあって、そこに留まるアントーニオも舞台から退場する。新たにできた三つの「家族」から取り残されるのだ。シャイロックとアントーニオという主要人物が憂鬱以下と憂鬱として、新たな社会から捨てられるのである。アントーニオの憂鬱は従って、出発点と結末とでは質的に別のものになっている。新たな資本主義から捨てられた憂鬱である。シャイロックは完璧に破滅する。

バッサーニオ、グラシアーノの憂鬱とは、貨幣になったポーシャとネリッサに支配され、新たに貨幣の「虜」になった「経営者」の憂鬱である。指輪＝貨幣を譲り渡したバッサーニオは、君臨する貨幣ポーシャの支配下に下ることによって、新たな資本主義社会での「罪悪感」を逃れられなくなり、企業であり家族である新たな共同体の「奴隷」になる。新たな資本主義からは取り残されるアントーニオとは異なる憂鬱である。

ジェシカの憂うつは、社会変動の後にも続く差別の構造に由来する。改宗したとはいっても、キリスト教徒にとっては、「あの悪人シャイロックの娘」として、過去を引きずると同時に、「ユダヤ人を止めてよかったな」と言うロレンゾーを入り口にするキリスト教社会には「同化」(assimilation)できない、遺物の生きている憂うつである。

こうして共同体は崩壊した。資本主義を牽引するポーシャだけが、貨幣として君臨し、共同体のメンバーであったバッサーニオ、グラシアーノ、ロレンゾーは個人化され、罪悪感と自己責任で生きる他はなくなった。

資本主義とは、資本の自己増殖を目指して利潤を求めて動いてゆく経済システムである。利潤は差異から生まれる。例えば、アントーニオの商業資本主義は、遠隔地に出かけて行って、本国で高く売れる品物を現地で安く買って、その利ざやを稼ぐ。17世紀以来の産業革命を機に広まる産業資本主義は、労働力の価値と生産物の価値の落差を利用して、等価交換しながら利潤を引き出す。また、手工業で生産していた同じ商品を、新たな技術を導入することで大量生産し価格を低くすることによって大量に販売する。これは手工業の現在の価格と、これから生産する未来の価格との落差を利用して利潤を稼ぐ。

ところが、少なくとも二つの価値体系の差異を繋ぐことによって利益を引き出す資本主義は、逆説的にも、媒介することによって差異を消滅させてしまう。遠隔地貿易が儲かることが分かれば、それに参入する業者が増えるし、現地にいる先住民も、複数の業者が提案する価格を比較することによって価格を釣り上げようとするから、利益の幅は小さくなって行く。産業資本主義では、労働力コストを低く抑えることが利益の源泉である。しかし、特に好景気の時には、給料を低くすれば、もっと給料の高い企業に労働者が流れるため、それほど給料が下げられない。従って、それほど利益が上がらなくなる。新技術を導入するといっても、他の企業も同じ技術を導入するから、平均化して、やはり利益は上がらなくなる。ということは、企業は常に新たな差異を作りだして行かな

くてはならないシステムなのである。

孤立した価値体系があれば、資本主義は必ずそれと既存の資本主義とを媒介することによって、落差から利益を引き出そうとするため、資本主義はすべての価値体系を均一なシステムに呑み込んで行く。従って、古い伝統はことごとく破壊され、「金儲け」に引っ張り込まれて行く。こうして全世界が平準化して行くのである。シェイクスピアの天才は、前資本主義社会から資本主義の世界への転換点を描き出したところにある。資本主義そのものがキリスト教に「寄生した」宗教なのである⁴。

今日、グローバル化によって世界は均質化され、資本主義は純粋な姿を現実に見せ始めた。しかし、資本主義の弊害がますます人類の生存環境を悪化させ、人類死滅の可能性さえ見えてきた。地球温暖化、大気汚染、ゴミの堆積、等々、今世界が資本主義に何らかの原理によってブレーキをかけなければ人類には未来がないところまで来てしまったのである。ただし、その可能性については、ここで紹介する時間はない。われわれはむしろ、次のステップとして、キリスト教の「愛の原理」がどのように差別を作り出すのかを検討したい。映画化されたこの作品を見る限り、裁判でのポーシャの判決が正当だと感じる人は少ないだろう。キリスト教社会にとっては、ユダヤ人の復讐を防いだ裁判は全うであり、だからこそ喜劇に分類されるのかも知れない。しかし、その文化には属さない読者の中には、とても喜劇とは思えないという人もいるだろう。その落差はどこにあるのか？その問いを展開するキーワードは「赦し」である。

3. 赦しと愛

男装したポーシャが介入するヴェニス法廷では何が起こるのか？キリスト教徒でもユダヤ教徒でもないわれわれがこの作品を読む時、あるいは映像で見る時、最後の法廷の場面は、キリスト教徒によるユダヤ人の強烈な差別、仕返し、復讐に対する逆復讐であるように見える。ユダヤ人の悲劇である。キリスト教とユダヤ教の問題、これは今日にいたるまで、ヨーロッパにおける大きな問題をなす。そこでわれわれは、作品『ヴェニスの商人』を読み直すためにも、

⁴ ベンヤミン

どれほど簡潔にであれ、問題の核心を取り出して見なくてはならない。私はその手掛かりを、哲学者ヘーゲルに求める。

3-1. 哲学者ヘーゲルが 1798-1800 年に書き残した『キリスト教の精神とその運命』という断片があって、その結論部が「ユダヤ教の精神」と題されている。そこで彼は、ユダヤ人を何だと規定しているのか？

ユダヤ人は、長くヨーロッパ各国に四散して暮らし、自分たちの国家をもたずに生活してきた。歴史の中で彼らは、度々暴力的的になってきたのだ。ヘーゲルは、歴史の中におけるユダヤ人の悲劇的運命をギリシア悲劇と比較して論じている。ユダヤ人の悲劇は、畏怖、畏敬の念 (Furcht) も同情、哀れみ、憐憫の情 (Mitleid) も惹き起こさない、そうヘーゲルは言う。ユダヤ人たちの身に起こったことが同情を呼ばないのだとしたら、それに対して赦すことも和解することもありえない。なぜなら、畏怖や同情の念は、ギリシア悲劇のように、一般に運命的な過ちを前にして、必然的な踏み外しの運命を前にして、美しい存在の (eines schönes Wesens) 踏み外しの運命を前にして生まれる。

例えば、よく知られたソフォークレスの『オイディプス王』を見てみよう。テーバイの王ライオスと妻のイオカステーとの間に息子が生まれた。ところが、王ライオスはアポロンの神託を受けた。「お前は息子に殺される」と。そこで王は、息子の踵にピンを刺して息子を山に捨てた。息子の名前オイディプスとは、「腫れた足」という意味である。拾われてコリントスの王に育てられた彼は、青年にいたったある時、自分の出生に疑問をもってデルフォイの神託を受けに行った。そこで神託は、「お前は父親を殺して母親を娶る運命にある」と告げる。自分の父親であるコリントスの王を殺してはたまらないと、オイディプスはコリントスに帰らぬことを決心し、放浪の旅に出る。テーバイに向かっていた彼は、老人の乗った馬車に出会う。道を譲れ、譲らぬと喧嘩になったあげく、彼がその年寄りを突き飛ばすと死んでしまった。テーバイの入り口まで来ると、怪物が人々を苦しめていた。怪物は「朝には4本足、昼には2本足、夕べには3本足で歩くものは何か？」という謎を人々にかけて、答えられなければ殺していたのである。オイディプスは謎を「人間だ」と言って解き、怪物は断崖から身を投じて死ぬ。それがスフィンクスである。テーバイの危機を救ったオイディプスは、王へと祭り上げられ、先王の妻イオカステー、つまり自分の母親と結婚する。神託は実現されたのだ。ところが、やがてテーバイは疾病に襲わ

れ再び危機に陥る。その原因を突き止めようと再びデルフォイの神託を伺ったところ、「先王ライオスを殺した犯人を追放せよ」との神託が下る。その犯人を捜して行ったところ、何と自分自身だったのだ。絶望したイオカステは自害し、オイディプスは自分の眼を潰してテーバイを去る。これがオイディプスの悲劇である。

ここでは、「お前は息子に殺される」との神託に従って運命を避けようとしたライオスと、「お前は父親を殺す」との神託に従ってその運命を避けようとしたオイディプス、それがボタンの掛け違いによって神託を実現してしまう。運命は変えられなかったのだ。ボタンの掛け違いを、ヘーゲルは「過ち」「踏み外し」と言っていた。そこに畏怖の念、憐憫の情が生まれ、赦しと和解が可能になる。誰もオイディプスが悪人だとは思わないのだ。

ところが、ヘーゲルによれば、ユダヤ人が蒙ってきた悲劇的な運命には、そうした畏怖と同情とが生まれえない。そこに生まれるのは吐き気を伴う嫌悪感だと言う。「吐き気を伴う嫌悪感」(Abscheu)は、畏怖、畏敬(Furcht)に対立する。畏怖は悲劇の主人公への観客の同一化をもたらすが、嫌悪感観客を遠ざける。なぜ、ユダヤ民族に対する仮借ない嫌悪感なのか？同情の欠如なのか？ヘーゲルによれば、ユダヤ民族自身が愛を欠いているからだ。ユダヤ人は愛することも赦すこともできない。ヘーゲルは、ユダヤ人の悲劇に匹敵するのはギリシア悲劇ではなく、シェイクスピアの『マクベス』だと言う。

ユダヤ民族のこの大いなる悲劇は、ギリシア悲劇とは全く異なったものである。この悲劇は、畏怖や同情を呼び起こすことはできない。なぜなら、畏怖も同情も、ある美しき資性の者が避けようにも避けられぬままに、ある過誤を踏み犯す [= 踏み外す] に至るそのような運命に対してのみ沸き上がってくるものであるが、ユダヤ民族の悲劇の場合には、唯々嫌悪しか感じさせないからである。この民族の運命はマクベスの運命なのだ。自然そのものに背き、異形の者に頼ってこれに仕え、人間の本性に宿るすべての聖なるものを聖なるものを踏みにじり打ち殺し、そのあげくの果てに、己が神々からも見捨てられ、(というのも、その神々は実は客体であり、そして彼はその奴隷でしかなかったからだが、) こうして己が信仰そのものの故に散り散りに打ち砕かれねばならなかった、あのマクベスの運命に他ならないのである(伴博訳『キリスト教の精神とその運命』、日清堂書店、1978年、p. 34)。

『マクベス』(Macbeth)とは、シェイクスピアの四大悲劇の一つ。1605年頃の作品。スコットランドの武将マクベス(〜1057)は三人の妖婆の予言に野心を抱き、ダンカン王を弑逆^{しぎやく}、将軍バンクォーを暗殺したが、後に王の長子らによって討ち取られる。彼は、臆病であるがゆえに残虐で、最後に彼が殺されても誰も同情しない。

ユダヤ民族が最終的な危機にいたる寸前にイエスが現われる。イエス自身がユダヤ人だ。だが彼は、ユダヤ人の運命に部分的な修正を加えるためではなく、ユダヤ民族の運命全体に対立し、愛と和解によって、ユダヤ民族にこの運命を乗り越えさせようとするのである。もちろんユダヤ人からは反発が起こる。全体的な嫌悪と対決が起こるのだ。イエスに反発するユダヤ人たちには愛がないのだから、両者の対立は愛によっては乗り越えられない。それが可能だとすれば、勇気や勇敢さによってでしかないが、それは実現しなかった。イエスの試みは挫折し、彼はユダヤ民族の中では闘いに破れ、イエスは犠牲として殺されることになる。イエスは自分の民族内部での闘いには負けたが、ユダヤ人以外の民族に迎えられて行く。こうしてキリスト教は世界に広まっていったのである。キリスト教は人類の和解による統一、愛による救済へと向かい、ユダヤ人はユダヤ民族の分離(選民思想)、法の文字通りの遵守、文字への執着に留まるのである。

イエスは、ユダヤの運命のどれか一つの部分とだけ戦ったわけではない。というのも彼は、その運命の他の部分に捕われていたわけではなかったからである。むしろ彼は、その運命全体に相対したのであり、自らこの運命を超えたところにたち、その民族をして同じくそれを超えさせようとしたのである。だが、彼がその際止揚せんとした敵意というものは、ただ剛毅果敢によってのみ制圧されうるものであり、愛によって和解されうる類のものではなかった。こうして、かの運命全体を超克せんとする彼の崇高なる試みは、その民族にあっては挫折せざるをえず、彼自らがこの運命の犠牲とならねばならなかったのである。イエスは、その運命のいかなる特定の部分にも組していたわけではなかったから、彼の宗教は、彼の民族のもとでこそ成就しなかったが一というのもその民は[この運命に]あまりにも多くのものを負うていたからだが一それ以外の世界では、この運命とはもやは何の関わりも持た

ず、それに対して護りまた主張すべき何ものも持たない人々のもとにあつて、まことに偉大なる伝播をみずにはいなかったのである（同書、p. 35-36）。

ヘーゲルによれば、キリスト教徒は愛による赦しを行い、対立する人々を和解させる（懺悔）。しかし、愛による赦しと和解そのものに対立する人々は赦さない。キリスト教に外から対立して来る人々には暴力をもって臨むのだ。それが、『ヴェニスの商人』の法廷で起こっていることである。

3-2. 仕掛けから罨へ

第四幕第一場、ヴェニスの法廷が開廷する。裁判長役を務めるのはヴェニス
を支配する公爵である。彼はアントーニオに「気の毒だ」と声をかけ、シャイ
ロックを呼び入れる。公爵の台詞を引用する。

……そこを通してやれ、わたしの面前に立たせよ。
なあシャイロック、世間ではみな思っておる、このわたしも
思っておる、お前はその敵意に満ちた態度を最後の実行の
ぎりぎりまで装っているが、時至れば一転して驚くべき
慈悲同情 (thy mercy and remorse) を示すであろう、いま見せている驚
くべき残忍も
ただの見せかけにすぎなかったと皆があつと驚くような。
お前が取り立てを求めておる科料はこの
あわれな承認の肉一ポンドだ、
そんな罰金など帳消しにするはおろか、
人間としての友愛 (with human gentleness and love) の志にうなが
されて
元金の一部をも免除する気であろう、…… (pp. 136-137)

ここで既に注目しておこう。「慈悲」「憐憫」「慈悲深い人間愛」「同情」、これら
はキリスト教の言葉である。まさに先ほど見たヘーゲルが、キリスト教を特徴
づけ、ユダヤ教徒には欠けていると指摘していたものだ。公爵とシャイロック
が対峙すること場面は、ヘーゲルの場面設定そのものである。それに対してシ
ャイロックは何と答えたか。

わたくしの意向はすでに申し上げた通りでございます。わが民族の安息日（Sabbath）にかけて、受け取るべき料金は必ずや受け取ると誓ったのでございます。それを拒否なさるとなれば、このヴェニスの特権も自由も危殆に瀕することになりましょうが。さあてな、なんでまた三千デュカもの金を捨ててわずかの重さの腐れ肉をほしがるとか。さあて変事は何といたしましょうかな。さよう、ただの気まぐれ、と、これでよろしゅうございますかな。……

……ま、わたしの方もわけは申せませんし、申し上げる気もございません。さようですな、強いて申せば宿怨でしょうか、アントーニオへの積もる憎しみ、それでみすみす大損承知の訴訟を起こしましたようなわけで。ご返事はこれでよろしいかな。（pp. 137-139）

「ただの気まぐれ」というこの後の部分は既に読んだ。シャイロックはここで既に、「安息日」「誓言」という言葉を使うことによって、ユダヤ教における誓いと契約の観念に訴える。アントーニオとの契約は、単に二人の間の契約ではなく、シャイロックの神との契約でもある。既に述べたように、シェイクスピアが当時のユダヤ人の状況を正確に描いているわけではない。むしろかなり劇画化されたものだ。それにもかかわらず、事柄の本質は正確に捉えていると言わなくてはならない。この法廷は従って、ユダヤ教とキリスト教の対決という様相を帯びている。

これからわれわれは、この法廷の推移を細かく見て行くことにする。慈悲をもって赦してやれ、それに対して、神との契約なのだから証文の文字を裏切ることにはできない、法廷における論争の構造はこれに尽きている。この構造が繰り返されて行くのだ。慈悲対証文、精神対文字、これがすべてである。通俗的な、ステレオタイプの対立だ。ユダヤ人は聖書の文字にこだわり、いかに聖書を読むのかを繰り返し学習する。安息日に、である。それに対してキリスト教徒は、聖書の文字は文字として、文字にこだわらず、それが精神的に意味するところを問題にする。キリスト教徒にとっては、肉の一ポンドは3,000デュカ、

あるいはその二倍、三倍の違約金に翻訳されうる。公爵は従って、シャイロックに「慈悲をもって翻訳で我慢しろ」と要求する。それに対してシャイロックは、「いやだ、オリジナルでなくてはいけない」と主張することになる。

公爵は重ねてシャイロックに要求する。

おい、慈悲を施さんではお前も慈悲を望めんぞ。(p. 141)

シャイロックは再び攻撃に転じる。

悪事をいたしておりませんこのわたくし、どんな裁きを恐れましょうか。皆さま方は大勢の奴隷を買い取って、さよう、驢馬か、犬か、騾馬か、畜生同然、卑しい仕事にこき使っておいでだ。

金で買ったものだからな。それではこう申し上げます、

……

わたしがこの男に要求する肉一ポンドはわたしの高い買い物だ、それはわたしのものだ、だからどうしても頂戴する。

ならぬとおっしゃるのなら、ようし、法律なんぞくそくいらえ、ヴェニス[・]の掟も闇の中、さ、お裁きを

願いましょう。どうかお答えを、肉は頂戴できますよ、な (pp. 141-142)

先ほど指摘したように、同じ構造の反復である。これで法廷は行き詰まったように見える。そこに男装に身を包んだポーシャとネリッサが登場する。場面は新たな段階に入る。

3-3. ポーシャが法廷をリードする。そ言語戦略は次のように始まる (pp. 147-148)

ポーシャ お前がシャイロックか？

シャイロック シャイロックと申します。

ポーシャ お前の起こしておる訴訟はまことに奇怪なものであるが、
手続において瑕疵がない以上、ヴェニスの法律は

今日のお前の訴えを退けることはできぬ。

PORTIA Is your name Shylock?

SHYLOCK Shylock is my name.

PORTIA Of a strange nature is the suit you follow,
Yet in such rule that the Venetian law
Cannot impugn you as you do proceed.

Is your name Shylock?は、普通は主語 your name と be とを倒置したと考えられるが、シェクスピアの文章には文法的破格が多く含まれており、次のシャイロックの台詞が Shylock is my name.であることを勘案しても、Shylock が疑問文の主語で Shylock is your name.の倒置だと考えられる。とすれば、「シャイロックはお前の名前か？-シャイロックは私の名前です。」と翻訳できるし、そう翻訳した方が良い。それを意味は大体同じだからといって、大場訳「お前がシャイロックか？-シャイロックと申します。」からは your name, my name の両方が消えている！これはどうか？

Of a strange nature is the suit you follow、suit は「訴訟」、follow はここでは「従事する」であるから、「お前が従事している訴訟は奇妙な性質のものだが」、in such rule that 「そのような規則なのでヴェニスの法はお前を非難することはできない」であり、as you do proceed、process 「訴訟手続」から推論して「お前は確かに手続を進めているのだから」との理由節である。「手続において瑕疵がない」とは言っていない。

[アントーニオに] となると商人、お前の生命は原告の手中にある。

[To Antonio] You stand within his danger, do you not?

danger は、古いフランス語では「君主の権力」の意味で、相手の生死を左右する権力であるから、「お前は彼の権力の内部に立っている」は、「お前の生死は彼の権力に握られている」ほどの意味になる。あとは付加疑問である。アントーニオは答える。

アントーニオ はい、この男はそう申しております。

ポーシャ 証文を認めるか？

アントーニオ はい認めます。

ポーシャ それではユダヤ人が慈悲を示さねばならぬな。

シャイロック はて何ででございましょう。お聞かせ願いたいもので。

ANTONIO Ay, so he says. [はい、彼はそう言います。]

PORTIA Do you confess the bond? [お前は証文を認めるか?]

ANTONIO I do. [認めます。後に見るように、語 confess は、キリスト教では「告白し懺悔する」という意味である。]

PORTIA Then must the Jew be merciful. [ならばユダヤ人が慈悲深くあるのでなければならぬ。]

SHYLOCK On what compulsion must I [be merciful]? Tell me that. [どういう強制で、私がそうあらねばならないのですか? 私にそれを言って下さい。]

この一節は後に問題にする。その後ポーシャは、慈悲 (mercy) なるものを賛美する大演説をするが、それも後に立ち戻ることにする。その後、ポーシャはアントーニオ側に支払う金の用意はあるのかと訊ね、バツサーニオが用意があると発言する。ポーシャはしかし、あたかもシャイロックを支持するような振りをして、ヴェニス法の法に照らしてみれば、2倍、3倍の金で契約を裏切るとは許されないと断言する。法を超える慈悲でなければ、ここに既に仕掛が始まる。ポーシャはシャイロックに、証文を見せてくれと言う (pp. 150-151)。

ポーシャ その証文を見せてくれぬか。

シャイロック はいはい、ここにございます。博士さま。

PORTIA I pray you let me look upon the bond.

SHYLOCK Here 'tis, most reverend Doctor, here it is. [それはここに。この上なく尊敬すべき博士、それはここです。]

ここでポーシャは、証文には肉一ポンドの記述しかないことを確かめ、再びシャイロックに慈悲を求める。シャイロックは再び拒否する。ポーシャが、アントーニオの借りを三倍にして支払おうと申し出るのに答えて、シャイロックはこう言う。

シャイロック 誓い、誓い、誓いを天に立てましたでな。

わが魂に偽証の罪を着せられましょうか？ このヴェニスを丸ごともらいましてできませんとも。

SHYLOCK An oath, an oath! I have an oath in heaven;
Shall I lay perjury upon my soul?

No, not for Venice! [誓約、誓約！私は天に誓約を抱えています。私が自

分の魂に偽りの誓いを課せと？いいえ、ヴェニスを引き替えにしてもいたしません。]

シャイロックにとってこの契約は、人間アントーニオとの間に交わされただけでなく、彼の神に誓ったものである。肉一ポンドを金に翻訳し、和解＝取引 (transaction) することは、神に対して偽りの誓約 (parjury) をしたことになる。だから、肉一ポンドに関して譲ることはできないのだ。ポーシャは、その発言を認めるかのように続ける。

ポーシャ なるほど、この証文は期限切れだ。

……どうだ、慈悲をかけてやれ。

三倍の金を受け取り、この証文をわたしに破らせてくれ。

PORTIA Why, this bond is forfeit. [もちろん、この証文は失効している。

ただし、契約が無効になったというのではなく、期限切れだという意味である。] ……Be merciful. [慈悲深くあれ。]

Take thrice thy money; bid me tear the bond. [お前の金の三倍を受け取

れ。私に証文を破るように命じよ。]

シャイロックは答える (pp. 151-152)。

シャイロック ……魂に誓って

どこのどなたが説得してかかろうとわたしの気持ちを
変えることはできん。さあ、ぜひとも証文どおりだ。

SHYLOCK [...] By my soul I swear

There is no power in the tongue of man

To alter me. I stay here on my bond. [私の魂をかけて誓います。人間

の舌＝言語の中には、私を変化させる力はありません。私はここで、私の証文に留まります。]

これで、逆転のための仕掛は整った。ポーシャは、シャイロックが彼の神に誓って、証文以外のことを要求しないという言質をとったのだ。後は、彼を陥れるだけである。

5-3. 先を急ぐ前に、「誓い」「誓約」「契約」「約束」という行為のことを考えてみよう。シャイロックは言っていた。There is no power in the tongue of man

To alter me. 「私の魂をかけて誓います。人間の舌＝言語の中には、私を変化させる力はありません。」ここには、「誓い」なるものが、人間を超えるのだという命題がある。ユダヤ教であれ、キリスト教であれ、一神教以外の宗教であれ、さらには無宗教であれ。

誓約は、人間の言語によってなされるが、シャイロックは、誓いを破る力は人間の言語の中にはないと言う。誓約は、人間が勝手に解き放つことのできない拘束＝絆＝証文＝契約なのだ。bondが証文、契約書と同時に、拘束、絆を意味することに注目しよう。人間の言語の中にあって、人間の言語を超える契約なのだ。シャイロックがこだわるヴェニス法（それは変更することができる）をも超えて、人間を超える法である。誓いは言語を経由するが、経由して言語を超えて行くのである。

私は何を問題にしているのか？誓約、契約、一般に約束と呼ぼう。約束は、無宗教においてであれ、常に二重の約束である。約束し契約することによって、私は約束によって作り出された約束を履行する義務を果たすと約束している。約束は、約束した時点から義務を果たす時点への時間＝遅れを作り出す。その間、私は常に約束を守るという約束を、約束を記憶するという約束を繰り返さなければならない。約束することは偽りの約束、偽りの誓い（parjury）をしないということの約束であり、誓いである。偽りの誓いこそ、最も重い罪になるだろう。約束によって生じた社会関係を壊さないという約束である。従って、

一回の約束は、約束を破らないという約束として、常に二重化されている。それがどうして人間を超えるのか？言語は、われわれが勝手に作り出したものではない。人間が人間である時には、自分が作りだした訳ではない言語が既に働いている。言語の起源なるものを問い質す時、人間は言語の起源以前を言語で想像すること以外のことではできないのだから、言語以前に遡ることはできない。そして、言語でなされる約束は、その人間を超えて、言語表現のままに約束を遂行するという約束である。ということは、言語を裏切らないという約束なのだ。他者と私が共有する言語への約束、それが他者との社会関係を作り出す約束を可能にしているのである。何に、誰に約束しているのか？一神教ならば、それを神にと言うであろう。無宗教ならば、人間を超える何ものかに、と言うであろう。何れにせよ、他者への約束は、その約束が言葉通りだという約束を常に含んでいるのである。

こうして約束とは法 - 外なことを行なってしまう。キリスト教の結婚式では、神父ないし牧師が、「汝、この者を夫として、良き時も病める時も愛すことを誓うか？」と問われて新婦は「誓います」、英語では普通 I do と答える。約束は言葉であるが、意味を伝えているだけではない。それ以上に、言っていることを実際に行なっているのだ。ここで約束とは、言葉でしかできない、言葉でしか実現しない行為に他ならない。言葉が行いになるような表現を遂行表現 (performative) といい、言葉によって行なわれる行為を言語行為 (speech act) と呼ぶ。約束とは、数ある中でも最も重要な行為である。しかし、よく考えて欲しい。キリスト教は元来、離婚を認めていないのだから、ここでの誓いは一生続くのだ。「この人を一生愛す」と約束する。一生！そんなこと約束できるだろうか？

しかし、一般に約束とは、同時に約束を記憶しておくことの約束でもある。忘れてしまつて約束を果たさないことだってあるからだ。時間の一点で約束が起こってすぐ消滅するとしたら、約束は約束ではなくなる。約束は、時間を通じて約束を記憶し保つておくことの約束でなければならない。約束には従って、約束を記憶し、記憶を約束することが含まれている。正直に誠実に話すという原 - 約束が、話す行為のすべてを支えている Yes であるなら、その Yes は、第二の Yes によって再確認されているのでなければならない。Yes, Yes、「はい、はい」、「はいは一度で結構」、ここからすべてが怪しくなってくる。

Yes, Yes、この反復、この二重の肯定、常に再肯定である肯定は、同時に機

械的・反復に墮落する道を開いてしまう。約束は一般に、約束を果たすまでの未来を引き込む行為である。約束は実現の遅れを生む。第二の yes はその遅れを埋め、記憶し、約束を保持するが、第一の yes に取って代わり、それを忘却する可能性をも引き込んでしまう。普通の契約や約束には期限がついているため、期限までに約束を果たさない場合にはペナルティーがつく場合が多い。しかし、期限付きではない約束もある。政治家が選挙の時に約束する公約など、当選した後でも政治家本人は覚えていると言うだろうが、そのうちにうやむやになって、何を約束したのか本人も有権者も忘れてしまうことが多々ある。次の選挙で同じ公約をする恥知らずだっている。嘘をつかないという原 - 約束は、根本的な約束であり、生きている限りのすべての時間に有効なのだから、それに期限はない。

この可能性、この不純さは、約束の誠実さ、純粹さに外からやってくる偶然なのではない。それは、約束の構造そのものから発生するのだ。約束に含まれる不純さは、「約束を忘れないで」と言われ「大丈夫、覚えている」と繰り返しながら、際限なく実現が遅れる可能性である。とすれば、「絶対に嘘をついてはいけない」と宣言したとしても、その機械的・反復は、原 - 約束の記憶の yes でしかなく、機械的に反復する人の言葉を正直で誠実だと判断することはついにできない。それゆえ、約束をする人が「良い人」であるか「悪い人」であるかには関わりがない。それは二次的な問題である。

誠実になされたとしても約束は、実現までの遅れという時間を発生させる。この遅れが、事後的に約束を嘘に変える可能性を引き込む。「可能的な」嘘の可能性を開く。この猶予が、「誠実に語る」という約束の実現を再検討し、「誠実に語る」義務を再検討する余地を生む。カントという哲学者は、その義務には例外がないという原則には同意しながらも、時と場合によっては例外があるかも知れないと思いつく人は、既に「可能的に」嘘つきだという。例外を探したあげくに、「やはり例外はない」という結論に達する人でさえ、既に嘘つきである。こうして彼は、嘘の可能性そのものを排除しようとしたのであった。しかし、「嘘をつかない」という原 - 約束が構造的に遅れを発生させる以上、この可能性を排除することはできない。

約束の実現の遅れという構造は、さらに奇妙な結果を生む。約束から実現までの遅れの間、私は、自分が死んでしまう可能性を否定できない。約束とは一般に果たせないかも知れないことの約束でしかない。必ず起こることを私が

約束することはできない。「秋の後には冬がやってくる」と約束することはできない。約束せずとも、冬はやってくる。私の約束と季節の変化には関係がないからだ。自分のことであっても、「私は来年 23 歳になる」と約束することもできない。また、自分が影響を与えることができないことも約束できない。天気予報士であっても、「今年の冬は暖冬だと約束する」ことはできない。彼には天候を左右する力がないからだ。逆に、約束できる事柄は、常に果たせないかも知れないことでしかない。教会での結婚式で、「一生の愛を誓うか？」と神父に問われて「はい」と答える時でさえ、それは果たせないかも知れない約束、誓いであり続ける。その時、誠実に約束する義務を遵守するということは、どう答えることなのか？本当に正直で誠実なら、「約束しますが、できないかも知れません」という言い方しかできないのではないか？にもかかわらず「はい」と答えて一生を、自分の全時間を先取りして愛を誓うというのは、何と大それた、かえって不誠実なのではないか？誠実に言いうることは「努力します」程であろう。従って、約束の誠実さには、最初から不誠実さが紛れ込んでいるのだ。嘘をつかないという原 - 約束を私は一生覚えているがゆえに、嘘をつく時には後ろめたさを感じるだろうが、しかし、自分が嘘をつかないという確信は常にはない。

5-4. ここでわれわれは、ポーシャの最初の言葉に戻らなくてはならない。彼女の狡知はさらに進む。

PORTIA Do you confess the bond? [お前は証文を認めるか？]

ANTONIO I do. [認めます。]

ポーシャは、「お前は証文を認めるか？」とアントーニオに問う。しかし、こう翻訳したのでは、動詞 confess の広がりや強さが分からない。大場訳では「認める」としか訳していない。それは「お前は負債を打ち明け、告白するか？」「お前は、違約しており、過ちを犯していることを告白するか？」という意味でもある。アントーニオは答える：I do. 「はい、告白します。」「私は間違っていました」「私は契約違反を犯しました」、懺悔であり、罪の告白である。この I do も非常に強いことに注目しなくてはならない。これまスピーチ・アクトである。私は、過去に交わした契約を記憶しており、ここにいる私は、過去に交わした

契約の主体と同じ者であり、その契約に反した者であり、そのことを告白する。

アントーニオは自分の罪を認めて、謝罪した。そこで、すかさずポーシャは、あたかも判決であるかのように命令する。

PORTIA Then must the Jew be merciful. [ならば、ユダヤ人が慈悲深くあらねばならない。]

形容詞 merciful の名詞形 mercy は「慈悲」であり、かつ慈悲によって罪人に与えられる「赦し」(pardon) をも意味する。the Jew be merciful は従って、「ユダヤ人が慈悲によって赦さなければならない」ということになる。大場訳はこれを「それではユダヤ人が慈悲を示さねばならぬな」としている。これでは、この場を作り上げているポーシャの策術も、キリスト教の動きも全く見えなくなってしまう。

最初の語 then に注目しよう。アントーニオは告白した、罪を認めた、ならば当然のごとく、赦さなくてはならない。ここにはあたかも、罪を認めて告白した者を赦さなければならない、慈悲を与えなければならないという法があるかのようなのだ。だが、罪を認めない者は赦す必要はない。赦さなくてよい。叩きのめしてよい。このあたかも法であるかのような命題が、キリスト教とその外部を隔てる境界線を形作っている。神を冒瀆し、告白せず、罪を認めぬ者には慈悲をかけなくてよい。またキリスト教徒が告白し罪を認めているのに慈悲をかけず、赦さぬ者がいたら、その者を赦さなくてよい。ヘーゲルが言っていたように、愛のない者は、愛の原理では和解できない。徹底的に潰してよい⁵。

⁵ さらに the Jew にも注目しよう。この場面を取り上げたジャック・デリダはこう言っている。ポーシャのこの呼び方は、目の前にいるシャイロックを指していると同時に、ユダヤ人一般をも表現しうるし、換喩的に歴史的な出来事をも喚起しうる。ローマ・カトリック総本山であるヴァチカン、ヒトラーのアンチ共産主義の身振りを評価し、ナチス・ドイツの行動を批判せずにいた。そのうちにナチス・ドイツはユダヤ人の「迫害」を始めたが、ヴァチカンは、それを非難することもなかった。結果は、戦後明らかになったように、600万人のユダヤ人の虐殺、ローマ人の虐殺、さらには精神病院にいたドイツ国民の「安楽死」である。20世紀末、まずフランス・カトリック教会がそのことを悔やむ声明を出した。それを受けて意見を訊かれた、当時のローマ法皇ヨハネ・パウロ2世は、「赦しを乞うのは常にわれわれだと指摘します」と述べた。アメリカ先住民や、過去に宗教裁判によって殺された数え切れぬ人々、そしてもちろんユダヤ人のことである。「赦しを乞うのは常にわれわれ」、この表現はおそろしく曖昧である。第一に、トートロジーかも知れない。キリストが「われわれ」キリスト教徒の罪を背負って十字架で死んだからか？「われわれ」キリスト教徒は、常に罪あるものだからか？もしそうなら、法皇の発言は、「赦しを乞うのは

Then must the Jew be merciful. この発言は誰に宛ててなされているのか？一つの発言によって、少なくとも二つの身振りがなされている。あたかも、シャイロックに向けて言っているかのようでありつつ、ポーシャは Then must you Shylock be merciful とは言わずに、Then must the Jew be merciful と言う。宛先を二重にしているのだ。もう一方では、発言は、周囲にいるキリスト教徒全員とは言わぬまでも（というのは、周囲の人々も逆転劇が起こるまでは気づいていないからだ）、アントーニオに宛てられている。ポーシャは、シャイロックに向かって発言しているような振りをしながら、暗にアントーニオに向かって、お前は告白したのだから、今度は「あのユダヤ人が」あるいは「ユダヤ人一般が」慈悲を示し、お前の負債を免除しなければならない、お前を赦さなければならない。そうしてやる！

ところが、名指されたユダヤ人であるシャイロックの方は、ポーシャの「下心」を理解していない。従って、駆け引きが水面下で進行していることにも気づいていない。彼は理性を失って、「気分で」訴訟にこだわっているからだ。従って、彼は憤慨し始める。既に引用しておいた。シャイロックは言う。 On what compulsion must I [be merciful]? Tell me that. [どういう強制で、私がそうあらねばならないのですか？ 私にそれを言って下さい。] ここから、ポーシャは、慈悲なるものを讃美する大演説を展開する。次には、それを検討しなくてはならない。

5-5. ポーシャがアントーニオに言葉をかけるところから再びスタートしよう (pp. 147-148)。慈悲は上昇する。

PORTIA You stand within his danger, do you not?

常にわれわれキリスト教徒」、「赦しを乞う人」＝「キリスト教徒」という、キリスト教の内部に閉じ籠って、何も新しいことを言っていないことになる。それとも第二に、「赦し」という行為そのものがキリスト教のものであり、キリスト教徒以外の人々のものではないと言っているのか？それとも第三に、「赦しを乞い赦される」ことは、キリスト教以外の人々にも共通のことであるにもかかわらずキリスト教徒は、世界に模範を示すというのか？意地悪いとの印象を与えかねないこのような疑問はしかし、「政治的発言」には常につきまとうことに注意しなくてはならない。しかも、「われわれキリスト教徒が赦しを乞うているのだから、今度はユダヤ人が慈悲深くあらねばならないし（慈悲の押し売り）、最終的に赦しを乞うのは神に対してである」。「われわれの罪を、神よ赦し賜え！」（ではユダヤ人はどこにいったのか？ユダヤ人には、Then must the Jew be merciful と言いつつ。）デリダ

ANTONIO Ay, so he says.

PORTIA Do you confess the bond?

ANTONIO I do.

PORTIA Then must the Jew be merciful.

SHYLOCK On what compulsion must I? Tell me that.

ポーシャ 慈悲というものは強制されるものではない。

それはな、この地上にしたたり落ちる

天界の慈雨である。

PORTIA The quality of mercy is not strained;

It droppeth as the gentle rain from heaven

Upon the place beneath.

シャイロックが compulsion 「強制」と言ったのに対して、ポーシャは The quality of mercy is not strained と言う。mercy とは慈悲であるとともに、慈悲による赦し、法を超える恩赦でもあった。動詞 strain は今では「ぴんと引っ張る」という意味とそれから派生した「緊張する」などの意味であるが、ここでは「強制する」constrain, compel を意味する。従って「慈悲なる性質は強いられるものではない。それは、優しい雨のごとく、天から下界へと落ちるもの」である。慈悲は従って、高みから低いところへ、強制されることなく降りてくる。どのような人間の法によっても強制されたり、強要されたり、命じられることはない。それは自由であり、従って、それが起こるか起こらないか誰かによって決定されることはない。証文＝拘束 (bond) に縛られた支払のように強制され計算されない。取引ではない。従って、慈悲による赦し＝恩赦は無償である。[無償か否かは後に問題にする。] ポーシャは続ける。

そこには二重の祝福がある、

与える者の祝福、受け取る者の祝福。

It is twice blest;

It blesseth him that gives and him that takes.

「慈悲は二度＝二重に祝福される。それを与える者を祝福し、受け取る者を祝

福する。」人間が他の人間に与える慈悲は二重に祝福されるのだ。与える者も受け取る者も。しかし、与える者は受け取る者より上位に位する。そこには上下関係がある。だからこそ、慈悲は雨のように天から下へと降りてくるのである。ポーシャは続ける。

慈悲こそは裁許うなるものの持つ最強なる力。玉座に坐する
帝王にあつては王冠以上に輝かしい。

王笏など世俗の権力を誇示するにすぎぬ、
すなわち畏怖と尊大の象徴であり、
王への恐懼、恐怖はここに生ずる。

'Tis mightiest in the mightiest; it becomes
The throned monarch better than his crown.
His scepter shows the force of temporal power,
The attribute to awe and majesty,
Wherein doth sit the dread and fear of kings,

mightiest は mighty 「強力な」の最上級であるから、「慈悲は最も強力なものの中の最も強力なものである」。最強の最強。最強を超える最強である。われわれは、最上級が競り上がって行く運動に注目しよう。it becomes The throned monarch better than his crown。throne 「王座」であるから、過去分詞 throned は「王座を与えられた君主」である。文法を確かめる余裕はなかったが、ここでは monarch は「～には」という間接目的語になっているようだ。従って、「慈悲は、王座にある君主にとっては、彼の王冠より良きものになる。」His sceptre 「王位の象徴の一つ、王冠とともに笏」、His sceptre shows the force of temporal power, The attribute to awe and majesty, Wherein doth sit this dread and fear of kings、「王の笏は、束の間の権力の力を示し、そこに王たちのあの恐れと怖れとが鎮座する畏怖と威厳の象徴を示す」。attribute は「属性、特質」であるが、ここでは「象徴」と理解する。慈悲は王の象徴である王冠よりも良いと、慈悲が王の権力より高いところがあると一旦述べた上で、再び王のもう一つの象徴「笏」が地上の権力の最高峰である王への畏怖と威厳を表わすと、王の権力へと話を戻している。それはしかし「束の間」のものだと形容しておいてもう一度、慈悲

はそれ以上のものだと言い直す。ポーシャは続ける。

しかるに、慈悲は笏の支配を超えて在る、
それは王の心という玉座に坐し
神ご自身の象徴となる。

But mercy is above this sceptred sway,
It is enthroned in the hearts of kings,
It is an attribute to God himself,

sway は「揺らす」という動詞だが、ここでは古い用法なのであろう名詞「治世・統治」という意味である。enthroned は throne「王座」の動詞形であるから「王座につかせる」である。とすれば「しかし慈悲は、この笏の治世を超える。それは王たちの心の中に王座をもち、それは神そのものの象徴である」となる。地上の最高権力である王は、笏の恐怖をもって統治するが、王が慈悲を与え恩赦を与える時、王は地上の権力を超え、心の中に神の象徴を宿す。王は地上の最高権力以上のところに登り詰めるのだ。最強以上の最強である。ポーシャは続ける。

かくして慈悲が正義を節するところ、地上の権力は
神の御力に最も近づく。だからなあ、ユダヤ人、
お前が正義を訴えるのはよくわかるが、また一方で……よく心得るがよい。

And earthy power doth then show likest God's
When mercy seasons justice. Therefore, Jew,
Though justice be thy plea, consider this:

season は動詞「香辛料で味つけをする、和らげる」であるから、「そして、慈悲が正義に風味を添える時には、地上の権力はまさに神の権力に最も似たものになって現われる。従ってユダヤ人よ、お前の申し立ては正義ではあるが、次のことを考えよ」となる。season、眼に見える、手で触れうる食べ物に風味を与える時、つまり空気の中に立ち上ってくる眼に見えない香りを与える時、地上の権力はそれ以上のものになる。シャイロックが There is no power in the tongue of man To alter me. 「私の魂をかけて誓います。人間の舌＝言語

の中には、私を変化させる力はありません」と言っていたのに対応して、人間が行なう慈悲は、人間を越えて神の域にまで達するのだ。ポーシャは続ける。

正義一筋では人間だれ一人として救いに与れぬことを……
だれしもが慈悲を祈り求めるであろう、
その祈りこそが、逆にまた慈悲を他に及ぼすことをだれしもに教えてくれる。
That, in the course of justice, none of us
Should see salvation. We do pray for mercy,
And that same prayer doth teach us all to render
The deeds of mercy.

course は「水路、進路」であるから、「正義の路を辿るのでは、われわれの誰も救いを見ることはない」。render はもともと「返す」を意味する動詞であるから、「われわれは慈悲を求めて祈る。そしてその同じ祈りがわれわれすべてに、慈悲の行いを [他人に] 返すことを教えるのだ」。ポーシャは、彼女の演説をこう締め括る。

これだけ申し聞かせるのも、お前の訴える
正義を慈悲で和らげてもらおうがためだ。その正義を
あくまで求めるのであれば、当ヴェニス of 厳正なる法廷は
そこなる商人に不利の判決を下さねばならぬからな。
I have spoke thus much
To mitigate the justice of thy plea;
Which if thou follow, this strict court of Venice
Much needs give sentence 'gainst the merchant there.

「私はこうして多くを話してきたが、それはお前の申し立ての [=お前が申し立てる] 正義を和らげるため。お前が申し立てを続けるならば、ヴェニスのこの厳格なる法廷には、そこにいる商人に不利になる判決を与える必要が大いにある」。不利な判決が予告されている。脅しである。

ポーシャのこの大演説さえ、キリスト教対ユダヤ教の水掛け論の構造を変えることはできない。既に見たようにシャイロックは、神に誓ったのだから、誓

いを曲げることはできないと拒否し、その後、いくつかの押し問答の末に、「肉はやるが血を一滴も流してはならない」と判決を下して大逆転が起こることになる。

この演説の中で注目すべきは、第一に慈悲による赦しが限らない上昇運動であり、人間の法と正義を超えて神の域に達するということだ。法による正義を超えたところから、慈悲による恩赦は可能になる。権力を超える権力、全能を超える全能である。目に見える外面的な笏と王冠は地上の権力を象徴するが、それは「束の間の」ものでしかない。それに対して、慈悲による赦しは超時間的なものであり、見えない「風味」をさらに一層与える、すなわち精神的な力である。それは「王たちの心の中に鎮座する」のであるから、見えない内面的なものである。シャイロックを説得しようとするポーシャは、シャイロックをキリスト教へと改宗させようとし、改宗した者に福音を伝える振りをしている。あたかも、シャイロックは既にキリスト教徒であり、だから自分が言うことを理解するはずだという身振りをしながら彼女は、彼をキリスト教の方向に導こうとするのである。シェクスピアはここで、ステレオタイプ化された対立に訴えている。ユダヤ人は肉体に執着し、外面的な文字を尊敬するが、キリスト教は、精神化し内面化する。そこには、「キリスト教に今改宗しなければ、ひどい目を見るぞ。どのみちお前は、拒否しても、強制的に改宗させられるのだから」という脅しが潜んでいるのである。

「取引を超えた慈悲を与えなければひどい目にあうぞ」、この身振りは逆説的である。シャイロックは、法が定めた証文に固執する。この取引以外の取引には応じない。肉一ポンドを3,000デュカの三倍の金に換えて取り引きするのを拒否するのだ。それに対してポーシャは、慈悲は法を超え、従って法が定めた契約、すなわち3,000デュカと肉一ポンドとの取引を超えていると主張する。慈悲は経済活動を超えるのだ。こうして取引を超える慈悲と取り引きしなければ、お前は損をするぞと迫る。とすれば、ポーシャが提案している慈悲は、精神は、やはり取引の対象になっているのではないか？取引を超える慈悲を与えねば罰を受け取るぞ。慈悲を与えれば、お前を赦してやる。借金と肉一ポンドの取引を止めて慈悲との取引に応じよ。内面化された取引である。とすればまた、キリスト教の慈悲はここでは特定の取引に他ならず、他の取引を排除する取引に他ならない。他の取引形態を暴力的に排除する、「普遍的な」と称する特定の取引形態である。規制のない自由な取引だけが最も神的な取引である、等々。

Then must the Jew be merciful. 「ならばユダヤ人が慈悲深くあらねばならぬ」。「ユダヤ人であり続けるためには慈悲を与えよ。慈悲深いユダヤ人であらねばならぬ。しかし、この命令に従ってシャイロックが慈悲を与えれば、シャイロックはキリスト教に改宗したことになる。その一方で、「お前は慈悲を与え改宗することを拒否するのだから、ユダヤ人であることを選ぶのだから、お前は改宗させられユダヤ人であることを止めなければならない」！シャイロックはどちらにしる負けなのだ。ダブルバインドである。復讐心に駆られて計算理性を見失ったシャイロックは、この計略を見抜けなかったのである。

5-6. 証文に拘るシャイロックは、「肉一ポンドはやるが、血を一滴も流してはならぬ」というポーシャの判決によって敗訴する。キリスト教の勝利である。シャイロックは「それじゃ三倍の金を受け取って引き下がる」と言うが、ポーシャはそれを許さない。「では元金だけで」、それも許さない。そればかりでなく、ヴェニス法はさらなる刑罰に処すと宣言する。「愛の宗教」であるキリスト教はここで、改宗しない挑戦者に剥き出しの暴力で答える。

ヴェニス法によれば、外国人〔ユダヤ人はヴェニスに住んでいながら市民権は与えられていない〕がヴェニス市民の生命を脅かすことは犯罪行為であり、それを犯した場合、犯人の財産は没収され、半分は命を狙われた市民のものになり、残りの半分は国家の所有に帰す。しかも、犯人の生命は、支配者である公爵の権限に属し、反論は許されない、云々。「これこそ、法に執着したお前が望んだことだ」！われわれが目にするのは、再び慈悲である。

犯人の生命は公爵の権限に属す。ポーシャはこう発言する。And the offender's life lies in the mercy Of the Duke only... 「そして、攻撃者の生命は唯一公爵の慈悲の中にある」。ヴェニス法は、犯人を死刑に処すとも、懲役刑に処すとも規定してはいない。犯人の運命は公爵の慈悲＝恩赦次第なのだ。キリスト教の慈悲を知っている公爵の判断次第である。台詞の最後にポーシャはこう付け加えている。Down therefore, and beg mercy of the Duke. 「だから、跪いて、公爵の慈悲を乞え」。シャイロックはダブルバインドから逃れていない。「キリスト教徒になって慈悲を乞え（＝ユダヤ人であることの死）、慈悲を乞わなければ命はない」という意味である。「われらが慈悲」である。

それに力を得て公爵はシャイロックに向かって言う。「われらキリスト教徒の

心根の違いを見せてやろう。命乞いせずとも命は取らせる。」(p. 160) That thou shalt see the difference of our spirit, I pardon thee thy life before thou ask it. shalt は shall の二人称単数活用形であり、冒頭の that は so that の省略である。従って「お前にわれわれの精神の違いが見えるように、お前が求める前に、お前に命は赦してやる」。pardon 赦すであり、mercy の系列にあることは言うまでもない。the difference of our spirit 「お前らユダヤ人の精神と、われわれキリスト教徒の精神との違いが見えるようにするために、最後までアントーニオを赦すことを拒んだお前とは異なり、お前が求める前に私はお前の命を赦してやる。どうだ、これがキリスト教の慈悲だ」！財産をすべて没収しておいて、慈悲の押し売りである！シャイロックにとっては、既に見たように、財産も娘も彼の命の一部なのだから、シャイロックは、その慈悲も赦しも拒否する。

いいや、命もなにもみんな取ってもらいましょう。

いまさらお情けなど結構。家を支える柱を

取れば家を取るも同じ、生きる手だてを

奪えば命を奪うも同じ。

Nay, take my life and all; pardon not that:

You take my house when you do take the prop [支柱]

That doth [does] sustain my house; you take my life

When you do take the means whereby I live.

【いや、私の命とすべてを取ってくれ。そんな赦しをしないでくれ。

我が家を支える柱をとるなら、我が家を取るのだ。私がそれによって生きて
いる手段をとるなら、私の命をとるのだ。】

更に追い打ちをかけてポーシャが別の慈悲を口にする。「アントーニオ、お前の慈悲はどうか？」What mercy can you render him, Antonio? 「どんな慈悲を彼に返してやることができる、アントーニオ？」アントーニオはそれに答えて言う (pp. 161-162)。

アントーニオ おそれながら、公爵および全法廷のご意見がいただけるのであれば、財産の二分の一に対する罰金はなにとぞ免除願いたく存じます。ただし、

残りの二分の一についてはわたくしの預かりとし、最近彼の娘を連れだした紳士に、彼の死後これを遺贈すること。加えて条件がいま二つ、一つはこの寛大な処置に応じて彼がキリスト教に改宗すること。いま一つは当法廷においてその遺産のすべてを、彼の子息たるロレンゾーおよび彼の娘に譲渡する旨正規の証書に残すこと。

ANTONIO So please my lord the Duke and all the court
To quit the fine for one half of his goods,
I am content; so he will let me have
The other half in use, to render it
Upon his death unto the gentleman
That lately stole his daughter.
Two things provided more: that for this favor
He presently become a Christian;
The other, that he do record a gift
Here in the court of all he dies possessed
Unto his son Lorenzo and his daughter.

[それなら、公爵閣下、法廷の皆さんにお願いします。彼の財産の半分に対する料金を免じて下されば嬉しく思います。そうして、他の半分を私に使用させ、彼の死にのぞんで、それを、最近彼の娘を盗んだ紳士に与えさせていただけだ。さらに二つのことを条件に。一つは、この恵みのために、彼が今キリスト教徒になる [接続法] こと。もう一つは、彼が所有して死ぬすべてのものの、息子ロレンゾと彼の娘への贈与を、彼が法廷で記録する [接続法] ことです。]

公爵 必ずそうさせよう、できなければ先に宣した特赦を取り消すまでだ。

DUKE He shall do this, or else I do recant
That pardon that I late pronounced here.

[彼はそうするであろう。さもなくば、私がここで先ほど発したあの赦しを私は取り消す。]

ポーシャ 承知したな、ユダヤ人、何か言い分があるか？

シャイロック 承知しました。

PORTIA Art thou contented, Jew? What dost thou say?

[be の二人称単数 art: お前は満足か、ユダヤ人？ 何か言うことがあるか？]

SHYLOCK I am content. [満足です。]

こうして勝利したキリスト教側では、慈悲と赦しのオンパレードである。慈悲を与えることも受け取ることも拒否するユダヤ人シャイロックからすべてを奪い去って、改めてシャイロックに慈悲をかけてやり、慈悲の名をもってユダヤ教を捨てさせ、キリスト教へと改宗させる。しかし、改宗したユダヤ人としてシャイロックは、やはりキリスト教徒からは蔑まれたままで生きることであろうし、改宗したのだから、ユダヤ教徒として彼は罪人になるであろう。ダブル・バインドである。

赦しのキリスト教化の一形態である。それは、赦しを普遍化し、赦しに基づく平和を世界化して行く過程ではない。「愛」の名の下に、特定の社会関係を暴力的に強要する力の動きに他ならない。その中でいまだに正義を語りうるならば、それはキリスト教化の内部においてではない。そこから果てしなく洩れ落ちる傷ついた残余の特異性から出発してでしかない。

参考文献

Sarah Kofman, *Conversions. Marchand de Venise sous le signe de Saturne*, Galilée, 1988.

Jacques Derrida, «*Qu'est-ce qu'une traduction «relevante»?*», in *L'Herne*, 2004.

岩井克人『ヴェニスの上人の資本主義』、ちくま学芸文庫、1992年。

ヘーゲル『キリスト教の精神とその運命』、伴博訳、日清堂書店、1978年。